

---

# 四角と丸（仮）

河灯 良平

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

四角と丸（仮）

### 【Nコード】

N2347D

### 【作者名】

河灯 良平

### 【あらすじ】

ダメ大学生の鏡、笹木太郎がある日一人の女性に一目惚れした。彼女への一途な思いと、一方的な思い込みにより、事態は思いがけない方向へどんどん進んで行く……

## 第1幕 笹本太郎

わたくし笹本太郎は、只今大阪の東通り商店街にある細い裏路地にて、下半身丸出しで人目を忍んで隠れている。

何故お前は大阪のど真ん中で、その様に破廉恥な姿でいるのか？  
皆のその様な疑問は言わずともびしびしと痛いほど察することができる。

しかし！ この世のすべての物事において理由というものが存在するのだ。

ここで私が述べておきたい事は、決して私が下半身丸出しで大阪に繰り出し、その状態に興奮してエクスタシーを感じるような変態ではない。それだけは我が名誉にかけて、理解してほしい。

先ほどこの世のすべての物事には理由があると述べたが、私にとってこの事態はまさに青天の霹靂であった。

その理由を説明しよう。

## 第2幕 笹本太郎

私、笹本太郎は大学受験に二回も失敗し、さらには第一志望の大学に落ち、第二志望の大学にも落ち、第三志望の大学にさえ不合格を宣告され、やっとの思いで第四希望の三流大学に入学した。

大学名を聞くと、親族一同は苦い顔をするような大学だったが、私は二年間のニートと言っても、大して変わらない生活と別れを告げる事ができる喜びで、入学当初は勉学の意欲で溢れていた。

しかし、結局私は二年間も大学に落ち続け、県外の人は名前すら知らないような大学に入学した男。そうそうこの負け犬根性は直らないもので、前期を終えた時点で私は大学に学費という名の募金を献上し続ける、ダメ学生になっていた。

私が大学に入って学んだ事と言えば、体に悪いアルコールの摂取方法と麻雀と単位の落とし方である。

そんな私が、昨夜は飲み会であったのにもかかわらず、本日は珍しく朝から大学の講義を受けている。

その理由は実に明快。私が只今、受講している講義に、私が恋い焦がれている女性がいる為だ。

その私の心を捕えて離さない彼女は、斜め前の席で教授をぱつちりとした黒く美しい瞳で見つめている。このくだらない講義で教授から目を全く逸らさない彼女は、真面目で美しい心の持ち主である現れである。

彼女と出会ったのは、ちょうど一週間前。大学前に住んでいる友人の家で、昨夜許容量以上の酒を飲み続け、酷い二日酔いになっていた。

朝起きると、家主は便器を抱えて眠っていた。喉が大変乾いていたので、机の上のグラスを飲み干し、むせながらその場に倒れこんだ。グラスの中身は昨晚飲んでいた焼酎であったのだ。今度はちゃんと水道から汲んだ水を飲み、空腹を満たすために食料を物色する。

しかし、この友人の家には酒とそのつまみしか存在しない、それにつまみの床に散らばっており、食べれる様子ではないが、そのうちの数個を拾い上げ食べる。だが、このような物では今の胃袋を満たすのは到底無理だ。

そこで、私は思い頭を持ち上げ、ひたひたとまるでB級映画のゾンビの様に、隣にあるコンビニまで歩いて行った。

通常よりも三倍程の時間を掛けてコンビニに辿り着き、中に入る。店員の、いらっしやいませ、との挨拶が頭に響く。重くなった頭を抱えながら、店の奥へ進む。適当に二人分の食料を目につく順番に掴み、ふらふらとレジに向かった。

私は下を向いてレジへの細い通路を進む、レジまでの道のりがあまりにも遠く感じる。

ふつと顔を上げると前方に女性がいると分かった。このままでは衝突する。避けよう避けようと頭で思っているが、思考の速さに体が追い付いてこない。そして、女性が前にいることが分かっていたいながらも衝突してしまった。

私は後ろによるめき、彼女は小さな悲鳴を上げ横に倒れ伏し、買おうとしていた文房具や化粧品がばらばらと地面に散らばった。

「も、申し訳ない」

私は即座に謝罪し、彼女を見た。

この瞬間、私の脳裏に雷のような電撃が走った。彼女の吸い込まれるような黒い眼、黒い髪、すらっとした長い脚、小さな顔に柔らかなそうな唇、口元のホクロ、その全てに恋をした。この女性は世界で一番美しく、運命の人であると直感した。

ところが、彼女は顔を真っ赤にして私の顔を見つめ、何も言わず、走ってコンビニの外に行ってしまった。残された私は、彼女の事を思いながらその場に立ち尽くすしかなかった。

もうこの時には完全に酔いは醒めていた。

この様にして恋に落ちた私は、可能な限りの情報網を駆使し、彼女の出席している講義を突き止め、彼女から斜め後ろ席を確保する

事に成功したのである。

今、彼女との距離は、わずか五十センチ程。見れば見るほど美しい女性である。私はこの奇跡の様な美しい女性を産んだ両親に感謝し、その両親を産んだ両親にさらに感謝したい。ああ、ありがとう。彼女の周りの空間が暖かさに包まれているように感じるのは、彼女の無垢な心、純白の精神がもたらす恩恵であろう。彼女の行動すべてが神々しく見える。

彼女は自分の横に置いてある可愛らしい赤いバツクの中に手をやる。何かを探しているようだ。

その時、彼女の視界が私を捉え、そして私たちは見つめ合った。心臓が跳ね上がり、呼吸は浅く、脈が速くなるのが分かる。

私の顔を見た彼女は顔を真っ赤にし、即座に前を向いた。私はもう有頂天だ。彼女が私を見て赤面して前を向く。つまり彼女は私の事を記憶していたことではないか！ やはりこの世に神はいた！ 私にも春が来た！ 飛び上がって叫びそうになるのを、我慢して机の下でガッツポーズをする。

こうして私は講義終了後、彼女に声をかける事を心に決めた。

### 第3幕 私、猫

携帯電話のアラームで、私は目を覚ます。

起きたばかりの気だるさを感じながら起き上り、アラームを止める。携帯電話の画面を見ると、四日前に別れた男からメールが届いていた。

内容を見ずに削除し、携帯電話をベッドに投げつける。それを柔らかな音で布団は受け止めた。

お前が浮気していたくせに、よりを戻そうなんて都合のいいこと考えるな。頭の中で何回も叫ぶ、もしかして声に出してしまったかも知れないと辺りを見回すが、指摘してくれる人は誰もいない。

あの男は自分が浮気していた事で、私を傷つけたと思っているよのだが、それがまた頭に来る。

私の中でお前の存在など、大きなものではなかったのだ。足元に柔らかない感触を感じ、視線を落とすと「いわし」が体を擦りつけていた。この子は生後六カ月程の子猫だ。

私が拾って来た時は、体は今の半分程で死にかけていたが、今は元気になり走り回って、ときどき私にいたずらをする。いわしは三毛猫で、鼻の頭にある小さな黒ぶちが可愛い。

「分かってるわ、あなたがいるものね」

いわしを抱き上げ、見つめる。にゃあ、と鳴いたのは、私の思いが伝わったからだろうか。

和歌山から大阪の大学にやってきて、半年がたち、大学にも一人暮らしにも、やっと慣れてきた。学業も順調で、今のところ単位は落としていない。

しかし、それは私の通う大学が、偏差値が低いことで逆に有名なほどの大学だからなのだけ。

トーストと野菜ジュースの朝食をとり、身支度をする。この約九十分の作業を終えて家を出る。

もちろん、いわしへの「行ってきます」は忘れない。

いわしはまた、にゃあ、と鳴く。

外は快晴。雲一つないとはこの事だ。朝の少し冷たい空気を、降り注ぐ太陽の光が温めていくのが分かる。

私の住む場所は、大学まで徒歩十五分程の距離な為、一人暮らしの学生が多くいるが、今日はいつもより少し早く家を出たので、学生の姿は少ない。

通い慣れた道を歩く、お決まりの道は入学以来変えていない。

道を半分ほど歩いたところで、私はコンビニに入る。これもお決まりなのだ。

自動ドアが開くと同時に、いらっしやいませ、と店員の挨拶が聞こえてきた。時間が早い為なのか、客は私以外いないようだ。店員は一人だけ。

私は心の中で、しめしめと笑う。

私はゆっくりと店内を一周し、店員の位置と監視カメラの場所、そして鏡の位置をそつと確認する。

まず私は化粧品のコーナーに行き、リップクリームと除光液をさつと右手に持つ。

そして、そのまま文具のコーナーに行き、目に付いたボールペンを、さらに右手に持つ。

そつと顔を上げて店員を確認する。

店員は商品の補充をする為に、私に背を向ける格好となっている。監視カメラからは、死角だ。

今しかない。

あとは右手に持つ商品を、鞆に入れるだけのこと。なに、簡単なことだ。

私は決して一人暮らしをしている為、お金に困りこのような事をするのではない。つまり万引きをするのではない。

初めて万引きをしたのは、高校三年生の時、受験を控えいららしていた私は、近所の本屋で、参考書を盗んだ。



そして私は、罪悪感よりも刺激的な一種の快感を覚えた。

それ以降の私は、盗む物こそ文具、本、化粧品など、高価な物ではなかったが、万引き行為を続けた。

常習になってくると、万引きを難なくこなせる様になり。それなりにコツというものも掴んだ。そうなると、金を払って商品を手に入れる事が、馬鹿らしく思えてきた。

だから今日も私は、商品を無料で拝借するのだ。罪の意識など皆無だ。

右手に掴んだ商品を鞆に入れかけたその時、突然何か私にぶつかり、その衝撃で私は倒れ、商品が床に散らばる。

恐る恐る振り返ると、そこには見た事のない男性が立っていて、私を凝視している。

しまった。今まで万引き失敗した事はなかったのに、ついにやらかしてしまった。もっとしつかり周りを、確認すべきだったのに。そんな思いが頭の中を、ものすごい速さで駆け巡る。しかし一向に考えはまとまらない。

顔を見られてしまった。どうしよう。万引きがばれると退学になる、そんな話は聞いた事はないが、万が一という事も考えられる。

もう一度男の顔を見る。まだこちらを見ている。

そう言えば、万引きは現行犯じゃないと罰せられないはずだ。

そう考えた時には、私は走って、コンビニの外へ出て、家に向かって走っていた。

走り出す直前に、男が何か言ったようだが、聞き取れなかった。

ああ、もうあのコンビニには、行けなくなってしまった。

風を切る音を聞きながら、私はただこの場から逃げて家に帰る。

その事だけを考えて走っていた。

## 第4幕 私

私は頭が禿げている教授の退屈な講義を受けながら、ぼんやりと教授が着用している趣味の悪いネクタイを見ていた。

教授の声が、読経のように教室を充満し、気だるい空気を作り出している。

この一週間ずっと、気分が晴れない。心の奥に靄がかかり重くのしかかっているようだ。

その理由は、今日からちょうど一週間前のあの男のせいだ。彼に万引きの現場を目撃されたのが、すべての始まりだ。

彼に脅されるかもしれない、などと怯えている訳ではない。全くないと言えば嘘になるが、それよりも今まで万引きは絶対にばれることはない和高を括っていたのに、その自信が根底から揺るいだ事と、どこか私の欠点が、公になってしまったような気がするからだ。それにしても、あいつは何者なのだろうか。もちろん、今まであんな男を見たことはない。忘れたい顔であるはずなのに、私の脳裏に鮮明に焼き付いている。

無精髭を生やし、顔面蒼白で、目は充血し虚ろだった。どこか酒臭かったような気もする。どうであれ、まともな男ではない。思い出しただけでもぞつとする。

あの時、店員の位置など確認せずに商品を鞆に入れておけば、こんな気持ちにならずに済んだのに……

そう思いながら、携帯電話を取り出そうと、鞆に目をやる。その時、誰かの視線を感じ、振りむいた。私は仰天する。私の斜め後ろに、なんとあの憎らしい男が座っている。しかもこっちをあの虚ろな目で見ているではないか。

背中から冷たい汗が吹き出し、口の中の水分がなくなり、乾燥した息が器官から漏れ出す。

私の逃げ出したい意思に反して、眼球はさらに彼を視界に捉え、

見ては駄目だ、見ては駄目だ、と思いながらも、目を合わせてしまった。そして彼はニヤリと笑う。

即座に前を向く。心臓の大きな鼓動が自分でも感じられる。どうしたことだろうか。訳が分からない。今までの私はこの講義を欠席したことはなく、おそらく彼はこの講義にいなかったはずだ。つまり、わざわざ今回だけ受講しにきたと言う事だ。しかも、私のすぐそばの席に。

彼は私を追い詰めてどうするつもりなのだろうか。どうしたらいいの、どうしたらいいの。

しかしながら、よく考えてみると、私の犯罪は未遂に終わった訳で、特に今の状態を恐れることはない気がする。

もしかしたら、彼はたまたまクラスを間違えて、たまたま近くの席に座り、たまたま私と目が合い、たまたまニヤリと笑ったという可能性もある。

私は何を考えているのだろうか。そんな偶然あるはずがない。

私は刹那の間に、こんなにも考え、こんなにも苦悩した。

そして次の瞬間、筆記具と講義ノートを手早く鞆に押し込み、立ち上がった。

一瞬、教授が私の方を見たが、そんなこと気にしてられない。勢いよく扉を開け、私は気づいた時には教室の外にいた。

教室から男が出てきてないことを確認し、私は勢いよく駆け出す。一刻でも早く、あの男から遠ざかりたい。私が考えていたことはその一点だ。

私は家と反対の方向へ走り出した。途中、友人が全速力で走る私を見て、何事か、と驚きの表情を浮かべていたが、気にせず走り続ける。

最近は何でこうも私は走っているのだろうか。すべてあの男のせいだ。

## 第5幕 私

走り出した私の足は、自然と駅の方角へ向かっていた。おそらく無意識内に、彼からもっとも早く、そしてより遠くへ離れる手段として、電車を選んだのだろう。

ここでタクシーを選択しなかったのは、私が裕福な学生でない証拠の表れだろう。

息を切らしながら駅に到着した私は、終点の梅田までの切符を迷わず購入する。改札を抜けホームに出ると、ちょうど電車は出発直前の合図を出しながら停車しているところだった。

すぐに電車に飛び乗る。ドアがぶしゅ、と音を立て閉まる。

車内はとても空いていて、私は一番近くの席に腰を下した。

電車に揺られ、外の移りゆく景色を見ながら考える。この悪夢は何なのだろう？ あの男は何者で、何が目的なのだろうか？ いや、目的は卑猥な行為に決まっている。何故なら、私は美人なのだから。そう思えば、彼の顔もその様な変質的な様相であったような気もしてくる。そう思うと鳥肌が立ち、身震いをする。

突如、一つの不安が浮かんできた。私は彼からの追跡を、逃れる事が出来ているのだろうか？ その考えが頭によぎった瞬間、背筋がひやりとする。

恐る恐る、車内を見回す。窓の外を眺めながら座っている小学生、吊皮を持って立っているスーツを着た男性、だらしなく床に座り込んでいる同じ大学だと思われる男女、隣の車両へ移動しようとする頭皮が寂しい老人。私は一人ずつ確認したが、彼は車内にはいなかった。

ふう、と長い息を吐き、胸を撫で下ろす。これで一安心だ。完全に逃げる事が出来たようだ。

安堵した私は、やっとくつろいで座席に座る事ができた。とりあえず今日は、彼からの恐怖に晒されることはないだろう。そう考え

ると、急に眠気がやってきた、電車の心地よい振動も加わり、瞼が次第に重くなってきた。私はその誘惑に身を任せ、眠りにつく。

私が目を覚ますと、電車はまさに、終点の梅田駅に到着するところだった。ガラガラだった車内の席もすべて埋まっている。

時計を見ると十二時を少し回ったところ。駅のホームに降り立った私は、少し戸惑う。それは当然である。特に予定もないのに、男から離れたい一心で、梅田まで来てしまったからだ。だからと言って、このままホームに立ちつくす訳にもいかず、私は人の流れに身を任せ、そのまま改札を出る。まるで海中を漂う海藻の様に。

所在ない私は、とりあえず駅から出ることにし、駅前のショッピングモールで、ウインドウショッピングする事にする。各店には一足早く次の季節の洋服が並べられ、店員は一樣に薄着で接客している。

しかしながら、どうも私は目的もなく時間を浪費するという事が苦手で、一時間もしたら飽きてしまった。私にしては一時間とは大健闘なのだが。こうして再び私は暇を持って余してしまう。

ある本に、暇な時間を潰すことができる人は、教養を持ち合わせている人である。との記述を目にしたことがあるのだけれど、私にはその教養とやらがらないのかもしれない。

飽きてしまったなら、帰るといふ手もある。しかし、わざわざ電車に乗ってここまで来たのに、一時間程度で切り上げて帰るのも口惜しい。それに、私の家は大学の付近。つまり、あの男に会う確率は多分にあるのである。これなら、生徒が下校し終わった夜に帰る方が、絶対安全とまでも言わなくても、出くわす確率は、かなり低くなるはずだ。

この様にして、私はこの場所に留まる決意をした。

ふらふら歩いていると、私はかっぱ横丁と呼ばれている、古本屋が軒並ぶ場所まで歩いていった。

そして、そのふらふらに身を任せ、ふらりと目の前の店に入ってみる。

その本屋は、これぞ古本屋。という様子で、狭い店内には、埃をかぶり黄ばんだ本が山積みになされている。

そこに積まれている本は、私には一生縁のないような小難しそうなタイトルで、値段もぼろぼろなくせに高い。一体誰がこんな、重い本を買うのだろう。漬物石にしか使えないわよ。それにしても、漬物石なんて考える私はおばさんみたいだ。

そんな事を考えて一人で笑っていると、今まで置物のように動かなかった店主が、訝しげな視線を投げかけてきた、それに私は不快感を覚える。

店主は私の顔を一瞥した後、太腿の方に視線を移動させ、その次は腰、そして胸で視線を止め、卑猥な笑いを浮かべる。

なんて気持ち悪い糞爺なのだ。いつその世から消えてしまえ。神様どうかお願いします。と、私は無信仰者にも関わらず一心に願ったが、店主はこの世から消滅することなどなく、まだ私の胸を凝視している。

そして、この怒りが次第にどんどん黒い塊となっていく。

「店主を困らせなさいよ」

それがそう囁く。

「店主を困らせるって言っても、一体どうすればいいのよ？」

私は自分に問いかける。

「あなたの特技を活かしなさいよ。うんと高い本を盗めばいいじゃない」

私の中の黒い塊は、はつきりと言った様に感じる。もはやこれは私の欲望だ。

もうその時には、私は本を盗難することを心に決め、それ以外の選択肢はこの世に存在しない。そんな考えさえ浮かんでくる。

そして、私は辺りを見渡す。すると、なんと言うことだろうか、私のすぐ傍に非常に古く高そうな本があるではないか。おそらく神がこの本を盗むように配慮してくれたのだろう。しかもその本は店主の死角にある。

もう、今の私には不思議にも失敗という二文字は頭の中から綺麗さっぱり無くなっており、店主のあたふたしている姿が手に取るように想像できる。

今すぐ実行すれば、必ず成功する。逆に直ちに実行せねば、失敗して私は負け犬の人生を歩むのだ。そんな考えが思考を支配し、私はその本に迷わず手を掛ける。

その本は見た目通り重かったが、なんとか落とさずしっかり掴む。そして、おもむろに鞆に入れようとした瞬間。私は本を持った手頸を、誰か他人の手によつてがっしりと掴まれた。

ああ、私はなんて馬鹿なのだろう。なぜ周りも確かめずに盗もうとしたのだ。前回と同じ失敗をまた繰り返してしまった。

思考は混乱し、目の前が真っ白になる。

私は、俯いたまま身を硬直させて、相手が何か行動を起こすのをぶるぶると震えながら待つ。その時間は、何十分にも感じるほど長いものだった。

## 第6幕 いわし

腕を掴まれた私は、俯いたまま体を硬直させ、ただただ次に起こりうるであろう惨劇に備えて体を硬直させていた。腕は強く掴まれており、振りほどくのは不可能なようだ、それにそんな勇氣は今の私にない。

しかし、少しばかり身構えた状態で私は下を向いて相手の反応を待っていたが、叱咤されることも、殴打されるも様子はない。そして恐る恐る体の警戒を解く。

怯えながら顔を上げ、相手を確認しようとしたその時である。私の腕は、物凄い力で引つ張られ、私は相手に牽引される形で、あつという間に店の外にまで相手と一緒に出た。あまりに強く引つ張られたので、腕が抜けるかと思つたが、人体は強靱に作られているようで、どうやら腕はそのままだ。

店から出た後も相手は未だ私の腕を引つ張るのを止めず、私は引つ張られたまま、相手の後ろを走つてついでに行く形になってしまつた。

この状態はいくらなんでも私の予想の範疇を超えている。誰が万引き犯を見つけて相手の手を取り、引つ張つていくだろうか。いや、そんな人は私の知る限りいない。それとも何かほかに目的があるのだろうか。

それでもなお、私は引つ張られ続け、人の混雑した昼間の大阪の街を抜けていく。道行く人は、私たちのことをカップルとも思っているのだろうか。誰も気にはしていないようだ。今の位置からは相手の後姿しか見えないが、かなりの長身のようにだ。それにこの力、間違いなく男だろう。

私はそのまま五分ほど、右に曲がったり左に曲がったり、引つ張られつづけ、ようやく茶屋町の路地裏で掴まれていた腕が解放された。手を放された瞬間、犯罪者が手錠を外された時の開放感を少し



理解できたような気がしたのは錯覚ではないだろう。強く握られ手首は血が止まっていたようで、少し青白く変色しているが特に問題はなさそうだ。

しかし、一瞬安心した私に、次なる恐怖が襲う。私をここまで引っ張ってきた異常者は、何が目的でこのような行為をしたのだろうか。きつと卑猥なことに決まっている。なぜなら、私は美人なのだから。兎に角、相手は異常だ。

先ほど失敗した相手の顔の確認を再度、恐る恐るする。相手が長身の為、見上げる形になる。いったい何者なのか。

やっと、相手の顔を確認した私は驚愕する。

私をここまで引っ張ってきた相手は、なんと、女性であった。今まででつきり、男性だと思いついていた私は呆然とする。そして、少し安心した。これで卑猥なことをされる可能性はなくなった訳だ。

しかし、相手が女性だからと言って変態でないという確証があるわけではない。彼女が真正のレスビアンで、私の体を狙っている可能性が全く無いわけでは無いのだから。

彼女を少し観察したところ、彼女は百八十センチメートルあるのではないか、という程の長身で、顔はすつと鼻筋が通っており、一重で鋭い目は知的な様でかつ獲物を狙う猛禽類の様な鋭利さも持ち合わせている。

その特徴が、彼女に独特の妖しさを備えさせ、非常に魅力的で、なかなかの美人としているのである。

当初は男性だと思い、実は女性であり。変人女性なのだから恐ろしい容貌を思い描いていたが、意外にも美人であった。この驚きの連続に私の思考は停止状態に陥り、私は何も考えられなくなってしまった。

「名前は？」

しばしの沈黙を破り、彼女が突然尋ねてきたが、あまりにも突然であったし、わたしの思考回路が停止状態なのもあったので即座に

答えられなかった。

「ははは、そんなにびくびくするな。お前の名前は何だ？ 名無しの権兵衛って訳ではあるまい。おい、私の声が聞こえているかい？」  
謎の彼女は微笑みながら、低くハスキーで美しい声で尋ねてきた。しばし、その綺麗な声が私の頭の中で反響し、甘美な気分に浸っていた。それ程美しい声なのだ。

「……………めぐみ……………です」

やっと、思考が正常に戻った私は、喉の奥から搾り出すように答えた。あまりの美声に警戒を緩め答えたが、聞かれたままに答えてしまう私もどうかしている。

「ほうほう、めぐみか。めぐみの上の名前は何なのだ？ それでもって、漢字はどう書くのだ？」

彼女は鋭い眼を光らせて、私の眼の奥を覗いている。

「あ、はい。にしくるめだ めぐみです。漢字はこの様に書いて、西久留米田恵です」

私は問われるままに答え、掌に漢字を一字ずつ人差し指で書いた。

「西久留米田恵、ニシクルメダメグミ、にしくるめだめぐみ」  
彼女は眼尻にしわを寄せ、そのしわを右手人差し指で抑え、ぶつぶつと私の名前を連呼する。

「あ、あの。何か問題でもありますか？」

「ん、いや。そんなことはないのだが……………いや、しかしながら、面倒だな」

「な、なんででしょうか？」

堪らず私は、尋ねる。

「君の名前は……………長いな」

「そうですか……………」

名前が長い。そう私は名前が長いのだ。この名前が小学生低学年の時にコンプレックスであった時もあったが、まさかこんな所で変態女に指摘されるとは！ それに今改めて考えると、よい名前だ。指摘するこの女が変なのだ。そもそも、こいつは誰だ。そして、な

ぜ私が親から授かった名前にケチを付けるのだ。そう心の中で激しく思ったが、声に出すことはできず、そんなこと、それは、え、あ、など小さく呟くことしかできない。

「なにか、覚えやすいあだ名を付けたほうがいいな」

「いえ！ けっこ……」

「マラゾンミーゴかクリップ・エリプトンのどちらがいい？」

私の断りを無視して、彼女はとんでもないあだ名を付けようとしている。そんな、八十年代のブルースギタリストみたいな名前を付けられてたまるか。どっちも嫌だ。何か良い名はないだろうか？

そうだいい名前が一つだけある。

「あだ名は、『いわし』をお願いします」

私は即座に答えた。それにしてもお願いします、とは私は何を言っているのだろうか。

## 第7幕 いわし

「いわし、いい名前だな」

そう言つて、長身の変人女は、私の肩をポンポンと叩き、私の即席で発案した。といつてもペットの名前なのだが、とにかく私の新しい名前を褒め称える。そして、カルシウムが豊富で素晴らしい、とも付け加える。

「では、私の事は『いたち』と呼んでくれたまえ」

こうして、長身変人女改め、いたちは八八八と両手を腰に当てて大いに笑つた。呼んでくれたまえも何も金輪際呼ぶつもりもないし、会いたくもない。しかしながら、この場から私は去ることができない。

「ところで、いわし。お前はなぜ古本屋で、あんなに汚くて、カビ臭くて、変人しか読まないような古本を盗もうと思つたのだ？」

やはり、見つかつていたのか……

それにしても、私たちの話しづりは古本に失礼だ。古本の神とやらがいたら祟られるであろう。幾分そのことについて抗議したかつたが、私は古本を万引きしようとしていたのが、やはり彼女には見つかつていて、何を言つても万引きを肯定してしまう発言になりそうでは何も言えないでいた。

「なに、私はいわしが本を盗もうとしたことを、咎めるつもりはこれっぽつちもない。ただ、私が言いたいの盗むならもつとうまくやらなくてはいけない。これだけなのだ。あのままだと、君は間違えなく店主に見つかるだろう。何故なら、彼は常に若い女性を観察し、その女性を自らの妄想の世界にいざなう変態的趣向の持ち主だからな。きつと君のことを監視していただろう。そして、君は彼に捕まり、警察に通報されるかもしれない。いや、まだそれならまだ。彼の欲求を満たすために、常識を逸した要求を君にするかもしれない。きつとそうなる筈だ。なぜなら彼は変態だからな」

「私たちは一気に話し、聞き終えた私は、変態なのはあなたも同様だ、そう思ったのは他でもない。」

「セクハラ的な要求は、さすがにしないでしょ？」

「彼は変態だ」

「そんな事をする、店主も捕まっちゃいますよ」

「変態に常識は通じない」

「私たちはそう断言した。そうか、だから私の目の前にいる女には常識が通じないのか。」

「ところで、いたちは何か用事で、古本屋にいたのですか？」

私は未だに、まったく正体不明な人物である、私たちの情報を得るために質問をする。それにこの様に会話をするのが一番安全なようない気もする。そして何よりも私の万引きの話からは遠ざかりたい。「それは、これさ」

「いたちは、無造作に服を捲りあげた。彼女の露わになったすらつとした腹部と、ジーンズの間には綺麗に装飾された小さな箱が挟まっていた。」

「確かそれは、古本屋にあった雑貨ですよ？　すごく綺麗だったので覚えています。高くなかったですか？」

「タダだよ」

「いたちは満面の笑みで答えた。しかし、店にタダの商品があるはずがない。タダなんてありえないはずだ。もってけ泥棒なんて古本屋で聞いた事がない。」

「タダなはずないでしょう。しかもあのケチそうな店主の店ではありえませんよ」

「盗んだものに、金を払う馬鹿な人間がいる訳がないだろう」

「え……」

私は絶句する。おまえもか、この野郎。そう叫びたくなるのを必死で押さえる。

「ははは、いわしと同じ事をしようとしたら。お前は失敗したけどな」

彼女は、まるで小学生が友達の失敗を茶化す様にけらけらと笑いながら言った。

そもそもお前が邪魔したからだよ。と反論したいところだが、彼女の邪魔が結果的には私を助けたかもしれないので、喉の辺りまでこみ上げてきた怒りを抑え、呑み込む。

「なんで、その箱を盗んだのですか？」

「綺麗だったからさ」

そんなこと言ったら、全てが犯罪の対象になるではないか。あ、あれが綺麗だ、ちょっと盗んでしまおう、なんて商品を盗んでいたらすぐに捕まってしまう。

「それに、あの店主にはちょっとした復讐をしたかったのさ」

「復讐……ですか？」

それから、いたちは如何に店主に恨みがあるのか話を始めた。しかし、これと言って大した内容でもなく、それ程恨みも内容だったので、途中で私は話を聞く行為を無駄と判断し、地面を歩く蟻を見ていた。まあ、結局のところ、店主の体臭が臭いとか、そんな次元の話しだった様な気がする。

「と言っ訳だ」

彼女は、幾分すつきりした面持ちで話し終えた。私は、それは酷いですね、と一応話を合わせる。

彼女はやっと腹から箱を取り出し、顔の前に持ってきた。その時、カランと音がしたのを私は聞いた。

「いたちさん、中に何か入っているみたいですよ」

それを聞いた私たちは、どれどれ、などと目を光らせ箱を開く。

その箱の中には、鍵が入っていた。

## 第8幕 いわし

私といたちは、駅近辺にある小さな喫茶店に腰をおろしていた。もちろん箱と鍵は忘れずに持っている。

「この鍵は一体何だろうか？」

「いたちは鍵を眺めながら言う。いたちに無理やり連れてこられた私は机の木目を見て、この木は樹齢何年ぐらいなのだろうか、そんな事を考えながら聞く。

「おい、ちゃんと話を聞いているのか？」

怒気を帯びた声で顔を近づけてくる。

「はいはい、聞いていますよ。鍵に番号が付いているので、おそらくはコインロッカーのカギでしょう」

「コインロッカーか……1211って書いているな。きっとこの鍵の持ち主は、胃が悪いのだろうな。だから、イニイイって意味で、1211にしたのだろう」

「いたちは、今世紀最大の発見をしたかのように意気揚揚と言う。

私はそんないたちを冷ややかな視線で見つめ、無視することにした。

「イニイイ。そう思うだろうか？」

ああうるさい。私は頑として無視する。

「イニイイ。落とし主は胃が悪いのだな。いわしはどう思う？」

あまりにもしつこ過ぎる。そして私が折れた。

「……そんな馬鹿な、駄洒落で番号を決める馬鹿なんていませんよ。誕生日か何かでしょう」

「何を言うか！ 駄洒落で決めて何が悪い！ そしてこれは駄洒落ではなく語呂合わせだ！」

「いたちはテーブルをドンと叩き、立ち上る。あまりにも大きな声だったため、鼓膜に痛みが走り、コーヒーを持って来ようとしていた立派な口髭の店員はトレイを持ったまま立ち止まり、私たち以外の唯一の客である老婆は驚きのあまり服にコーヒーをこぼした。」

「いえいえ、いたちさんの言う通りです。その通りでございます。私は何も考えず、馬鹿な発言をしてしまいました。そう言えば先日、私も語呂合わせで、番号を決めました」

「いたちの突然の怒りに私は驚き、両手を合わせて即座に謝罪してしまっただ。」

「分かればよろしい」

「何が分かればよろしいのだ、この変態女。と罵ってやりたかったが、私も成人した大人の分別ができる女。多少の万引き癖はあるが、常識ある振る舞いぐらいできる。」

「申し訳ない」

「そう言った直後に、横でコーヒーを渡すタイミングをつかめずにいた店員は、ここぞとばかりにそそくさとコーヒーを置いて退散し、急いで奥の老婆のところへおしほりを持って行く。」

「コーヒーから出る芳醇な香りが私の心を少し和ませた。」

「いたちさんは、その鍵をどうするつもりですか？」

「もちろん、コインロッカーを開けるさ。鍵は錠を開けるために存在する。世の中のルールを歪めるわけにはいかないのだ」

「また、訳の分からないことを言い出した、そんなルール聞いたことなどないが、どんどん気にならなくなってきている自分がある。これは順応というやつだろうか。」

「でも、他人の鍵ですよ」

「これは私の鍵だ」

「そうですね」

「面倒なのですぐに肯定し直す、この人とともに会話するのは無理だ。」

「コーヒーを飲み、落ち着いていた私の頭にある疑問が浮上してきた。その疑問とは、私は会話をしている。いったい誰と？ もちろん、いたちである。何故、いたちと？ そうこの部分が疑問なのである。」

「……いたちさん」

「ん？ なんだい？」



「私はなぜ、いたちさんと喫茶店にいるのですか？」

そう、これが謎なのだ。

「それには理由が必要なのか？」

「必要です」

「いわしがいて、私がいる。ただそれだけだ」

「それは理由ではありません」

「そうだな……君はロッカーの中身が気になって仕方がない。そうだろうか？」

「残念ながら、差ほど気になっていません」

私ははつきりと言った。ロッカーの中身より、地球温暖化問題の方がまだ興味をひかれる。そして実際にそう言ってやった。

「万引き犯なのには？」

いたちは笑いながら言った。私は誰かに聞かれていないか心配で辺りを見回すが、誰もいないので安心する。

「あんまり声に出してそれを言わないでくださいよ。それに万引きは全く関係ありません。そして、私は店の損失には興味がありませんが、地球温暖化問題に興味があってもいいでしょう。それよりもなぜ私たちは一緒にいるのですか？」

彼女と会話をする時は、一回一回訂正しないと話が脱線し、そこそ地球温暖化問題について討論することになりそうである。

「いわしはそう言うが、君はなぜ私といるのだ？」

「私は今すぐ家に帰りたいですよ」

「それは駄目だ」

いたちはピシリと言う。

「なぜですか？」

私は少しむっとして、言い返す。

「それは、言わずとも分かるだろう。だが、あえて言おう。君が「インロッカーを開けると面白いことが起こる。そんな気がする」

そんな気がするとは何ということだ。そんな理屈がまかり通るなら、国家間の紛争も即座に終決してしまうだろう。うん、君の国と

は今から仲良くなれそうな気がする。そんな感じだ。

「いわしは本当に、ロッカーの中身に興味がないのか？」

「ありません」

「もしかしたら、宝くじが入っているかも」

「宝くじがあっても、多分当たってないですよ」

「きっと当たっている」

「当たってないし、興味ありません」

「じゃあ、血のついたナイフが入っているかも」

こいつは小学生なのか。とんでもない事を目を輝かせ言っている。

「コーヒーの湯気が彼女の顔の前で怪しく曲がる。」

「それなら益々、見たくないですね」

「そうなのか？」

「だって、そんなのを見つけてどうするのですか？ 余計に困るだけですよ」

「確かにその通りだ」

「私たちは以外に、すんなり引き下がった。でも血が付いてないナ

イフは魅力ないよな、そうぶつぶつ言う。

「じゃあ、百万円かも」

「……それは、欲しいですね」

「お金は単純に欲しい。それは当たり前だ。」

「ほら見る。ではロッカーを開けて百万円を手に入れようではないか」

「でも、それはかなり確率が少ない希望でしょう。絶対に入ってませんよ」

「しかし……」

「絶対に入っていません」

「この世に絶対などないぞ、可能性は常に存在するのだ」

「あっそうですか……」

「いい加減、この人の会話は疲れてくる。」

「興味なさそうだな。では、マスクのライブチケットかもしれない」

私は驚いてコーヒをこぼすところだった。なぜならば、マスクと言うのはインディーズのロックバンドの名前ある。このロックバンドは名前の通り、メンバーはマスクをかぶっている。ボーカル、ギター、ベース、ドラムの四人で編成されており、このバンドが作り出す世界観には圧倒的なのだ。特にボーカルの女性のハスキーな声は、聞き手をどこか違う世界に引きずり込む様な魅力を備えている。

なぜ私がこの様に、マスクというバンドに詳しいのかと言うと、私のこのバンドの熱狂的とも言えるファンであるのは既にご察してあると思うが、このバンドは以前、私の地元の和歌山で活動しており、その後大阪を中心に活動を移動した。実は私が大阪の大学に入学したのも、少なからず影響している。

しかし、私が驚いたのは、熱狂的なファンであったのだけが理由ではない。このバンドは他のバンドと比べてライブ活動が極めて少なく、そしてCDも出さず、ホームページもない為、圧倒的な実力を持ちながらも知名度はとても低いのだ。だから一層に彼女の口からその名前が出たことに驚愕した。

「いたちはさんは、マスクを知っているのですか？」

もしかしたら、声が裏返っていたかもしれない。

「まあな、だからチケットが入っていたら素敵だろ？」

「それは素敵です！でも、私の知る限りマスクのライブは近いうちにはないですよ」

そうなのだ、私は必死にマスクの活動を調べたが、まったくもってライブの予定がないようなのだ。

「ところがどっこい。なんと、今夜マスクのシークレットライブがあるのだよ」

今度は私がテーブルを叩いて、立ち上る。

「そ、そ、それは本当ですか！でも、なぜ、いたちさんがその事を知っているのですか？」

私はよっぱど大声を出したようだ、店員がこつちを睨み、老婆はまたコーヒーをこぼした。

「まあまあ、座りたまえ」

いたちが手を上下させ、座るように促す。

「これは確かな筋からの情報なのだ。まず間違えない」

これが本当なら、こんな所で呑気にコーヒーを飲んでいる場合ではないではないか。

「そのチケットはなんとか手に入らないですか？」

「君はファンの様だから分かるだろう。知名度は低いが、熱狂的なファンが多いのだ。だからチケットは即完売する」

まさにその通りである。しかし諦め切れない。

「しかし、ロッカーの中に入っているとしたなら、いわしはチケットを手に入れることができるな」

いたちはニヤリと笑い、私をじっと見つめた。

「ロッカーを開けに行きましょう」

馬鹿げていると分かっているながらも、私はそう言ってしまった。

ないと分かっているながらも行動せずにはいられない。

この世に絶対などなく、可能性は常に存在する。どこかで聞いたようなセリフを反芻する。

そして、いたちは大声で笑った。

## 第9幕 笹本太郎

彼女が教室を飛び出して行ったのを見た私は、すぐに彼女の後を追いかけて行く。教授、生徒一同の訝しい視線を感じたが、それどころではない。

私が教室の外に飛び出し、彼女を探す。そして、走っている彼女を発見する。かなりの距離があるが、私が全力で走れば所詮は女性、すぐ追いつくだろう。私は全力で走りだす。

しかし、彼女の足は思ったよりも早く、そして私の足が思っていたよりも遅かった。進むにつれて距離が開き、風を切る音ではなく、かすれた息と和太鼓が鳴るような心臓音が聞こえる。

そして、彼女との距離は見る見るうちに開き、駅に入って行くところまでは確認したが、その後完全に見失ってしまった。

私はとりあえず、終点の梅田の駅までの切符を購入し、駅のホーム出る。ホームには電車が停止しており、今まさに出発しようとしているところだ。

私は急いで乗り込もうとする。その時、目の前で扉が閉まりかける。

無理やり体を入れようとした時、再び扉が開いた。どうやら車掌が私の姿を見て再び開けて様だ。阪急電鉄も捨てたものではない。

電車に文字通り飛び乗った私は、車両をくまなく探索するが、愛しの彼女を見つけないことが出来ない。走り出した電車の定期的な振動音が響く。

「俺の事を見て、恥ずかしくて逃げてしまうなんて、なんて可愛い女性だろうか」

そう小声で呟き、むふふ、と微笑むと向かいに立っていた老婆があからさまに不快な顔をして私を見る。私は咳払いをし、早々にその場を立ち去り、隣の車両に移って彼女を再び探す。

この車両にも彼女の姿を見つけないことができず、もしかしたらす

で下車したのかもしれないと不安がよぎった。

しかし、その時である。隣の車両に頭を少し横に倒しながら寝ている彼女の姿を確認する。

早く移動せねば、そして彼女と対面し、我々は結ばれるのだ。

しかし、彼女と対面してまず何を話せばいいのだ？ 紳士のように、あら今日はお日柄もよく……などと言えはいいのだろうか？ ええい、そんなのどうでもよい、彼女は俺に惚れている。だったら、よっぽどの失態をせぬ限りは何を話しても良い筈だ。そう思い至って扉に向かう。

車両の連結部分の扉を開けようとしたとき、私は扉の前に一人の老人が立っている事に気がついた。

「おい、爺。邪魔だ。そこをどけ」

私は出来る限り、慎重に言葉を選んだのだが、老人はくしゃくしゃの顔をさらにくしゃくしゃにして睨んできた。

「坊主、その口のきき方はなんや。お前は人様への頼み方も知らないのか」

そう言つて、老人は激昂したのである。

私は丁寧に頼んだのにも関わらず、これに文句を付けてくる。これは所謂、逆ギレつてやつである。

「なに怒っているのだ。俺は隣の車両へ移動しなくてはならんのだ。爺よ、逆ギレなんて、大人のすることではないぞ。ましてや、しわくちやの老人がする事ではない。さっさとそこをどけ」

私は丁寧な頼みも虚しく、老人は怒り心頭の様子である。この様に物分かりの悪い連中がいるから、この世の中は上手く回らないのだ。

「なんちゅう餓鬼や。親の顔が見てみたいわ」

老人はしゃがれているが、しっかりと声で言った。

「親の顔だつて……俺の親の顔は……」

「なんや、聞いちやあかんかったか。親はおらんのかすまん」

「違う。喉が詰まったのだ。俺の親はちゃんという。俺の親の顔は

見たものじゃない。それは酷い顔だ」

数回咳払いする。

「なんや生きてるんかいな。せやけど、ちょっと今のおもろいやないかい」

何が面白かったのかは、私には全く分からなかったが、ボケてる老人とはこんなものなのだろう。しかし、老人は先ほどの様に怒っている様子は消えていた。

「では、そこを通してくれ」

「嫌や」

老人は両手を広げる、ここを通さまいとの心の現れだろうか。何とも鬱陶しい爺である。

「何故だ、お互い理解し合えたのだから通してくれてもよいだろう」「理解とはなんや、何にも理解しあえておらんぞ。お前がちょこつと、おもろい事を言っただけやないかい」

「じゃあ、どうしたら通れるのだ？」

「それは、勝負して勝ったら通してやろうやるわい」

「勝負？」

「そう、勝負や」

そう言って、老人は骨の上に皮が張り付いただけの様な胸を張る。しかし何故この様な場所で爺と勝負をしなくてはいけないのだろうか。だが、爺は普通に通路を譲る様子もない。

「勝負とは何を？」

「それは、この場で出来る勝負と言ったら、じゃんけんしかなかるう」

「じゃんけん？」

私は少し声を裏返す。

「じゃんけんっていうのは、グー、チョキ……」

そう言って、老人は手を握ったり開いたりして、じゃんけんの説明を始める。

「じゃんけんは知っている。なんでじゃんけんなのだ？」

「そりゃ、この状態だと、じゃんけんぐらいしか出来へんやろう」  
そもそも、勝負する理由が全くもって分らないが、確かに、こんな電車の中でトランプをやる訳にはいかず、むしろトランプなんぞ持っていない。要はじゃんけんで勝利し、さっさと彼女の元へ行けばいいのである。

彼女の方にちらりと目をやると、まだ彼女はすやすやと眠っている、と言う事は何も今すぐ彼女の元に行くことはないのである。

彼女が目を覚した時に、偶然にも私が目の前に立っていたという方が自然かつ素敵であろう。

そうして、今度は老人の方に視線を移した。それを待っていたかのように老人は右手を大きく上げ、じゃんけんほい、と大きな声をあげた。急いでこちらも手を出す。

一度目の勝負は老人の勝利だった。なに、じゃんけんなど運の勝負、あと数回すれば確実に私は勝利するであろう。

そのはずであった。

どういう訳か、勝負は十二回目なのに、私は一度も勝利できずにいる。これはどういう事なのだろうか。幸いなことに彼女はまだ眠っている。

そして、十三回目の勝負も私は負けた。こんな事が起こりうるのだろうか？ 周りの乗客も最初は車内でじゃんけんをする我々を怪訝な目で見ていたが、一向に負けない老人を見て、好奇の目を向けているのが感じられる。

真横の女学生などは、目的の駅に到着し下車しようとしたのだが、再び戻ってきた。そして我々の勝負が終わっていないのを確認し安堵していたのだった。

しかしながら、じゃんけんは一向に終わらないのである。つまり、私は一向に勝てないのだ。

もう、何回目の勝負になるだろうか、次ぎはパーを出すべく、私は腕を上げたその時にある事に気がついた。

さっきから、電車が動いていないのだ。はて、どうしたことだ。



と駅を見て、私は驚愕のあまり腰を抜かしそうになった。

私が見た駅名は、終点の梅田駅だったのである。

隣の車両を見ると、乗り込む客が我先に席を確保しようとしているところで、そこにはもはや彼女の姿はなかった。

私が、終点に気付かなかったのは、じゃんけんのせいだけではない。我々の周りの乗客は降りようとせず、我々を取り囲むように私と老人の手に熱い視線を送っていたからである。これでは終点にいるのに、気づかない訳だ。

老人も終電に着いたことに気付いたようで、私の顔を見て顔をくしゃくしゃにして笑った。

「お前の運なんてこんなもんや」

そう言っただけだ。私はあまりの悔しさと彼女に会う機会を失った失望のため頭の中で、爺を殴り倒した。現実の爺はまだ笑っている。

私は、ああ、と声をあげ頭を抱える。まさに絶望的である。

かくして、私は彼女を完全に見失ってしまった。

## 第10幕 笹本太郎

電車の扉がプシュツと短い音をたてて閉まる。

あの憎らしき爺のせいで私は彼女の姿を完全に見失ってしまった。駅のホームを吹き抜ける風が寂しさを駆り立てる。なんて運がないのだ。

ここに立っただけでも仕方がないので改札口に向かう。乗客はすでに改札を通った後の様で人はまばらだ。

「おい、坊主」

突如背後から呼び止められた。しかし、振り返らずとも声の主は分かる。そうとも、忘れるものかこの声を。振り返ったそこには憎き爺がちよこつと立っている。さっきまで一緒にじゃんけんをしていたのだから近くにいて当然なのだが、非常に腹が立ってしまった。

「なんだ、爺。お前のせいで彼女を見失ってしまったではないか」

「お前は、ほんまに年上を敬うつちゆうことのできん奴やな。それにしても彼女ってなんや？ お前は電車の中に一人でおったやろ」

爺は髪の毛のない頭をぽりぽり掻きながら言う。

「横の車両に乗っていたのだ。爺がじゃんけんなど始めるから、見失ってしまったではないか、どうしてくれる」

「横の車両？ なんや、お前はその娘の後をつけておったんかいな。今風に言うとなスチョーカーやな」

「それを言うならスチョーカーだ、スチョーカー。そもそも、俺はスチョーカーなどではない」

「じゃあ、なんでつけておったんや？」

そう言われて、少し口ごもる。

「それはだな、まだ公式には知り合いではないという事で……しかしながら、彼女が私に恋い焦がれている事は、明白な事実であって……つまり私は……」

口に出していると、頭の中が混乱し、バラバラになったパズルの

様に当てはまる場所が分からなくなってしまった。

「なに訳分からんこと言ってるんねん。知り合いでない子をつけるなんて、要はスチヨーカーやないかい」

爺は骨だけの様な指で私を指した。その行為がはたしてどういう意味をもつかは分からぬが、ドキリとしてしまったのは、私の心の奥底に罪の意識があるからなのか。いや、そんなはずはない、なぜなら私に何一つとしてやましい事はないのだから。心を落ち着かせるために気づかれぬようそっと深呼吸をする。

「とにかく、爺のせいで見失ったのだ、責任を取ってもらおうか」

「何言ってるんや。お前もじゃんけんに同意したやろうが、負け続けたお前が悪いわい」

「そんなことはない。それにしても爺、じゃんけんが強過ぎではないか。一体どんなインチキを使ったのだ？」

そうなのである、この爺のじゃんけんの強さは異常だ。確率の勝負であるじゃんけんで、こうも連勝できるはずがないのだ。

「インチキなんて使ってるへんわ。この餓鬼が」

「何をぬかすか、この骸骨爺。インチキでもしないとあんなに勝てるはずなからう」

「インチキなんてせえへん。そもそも、じゃんけんでどうやってインチキするんや？」

「む……それは……」

「ほら、無理やろうが」

「さては爺、恐ろしくほどの動体視力の持ち主だな。それで、俺の出す手を見て、勝つ手を出したのだ。これは後出した。よって、俺の勝利だ」

「お前はあほか、そんな事できるはずないやろ。そもそも、今ここでわしに勝利して何の意味もないやろ」

確かに、爺の言う通りだ。この骸骨のお化けの様な爺に、そんな動体視力が備わっている訳がない。仮に、そうであったとしても、彼女が過ぎ去った今、勝利しても意味がないのだ。

「では、どうやって勝ち続けたのだ？」

いささか狼狽して尋ねる。

「女神が見えるんや」

「は？」

「女神が見えるんや」

でたらめな爺であるから、完全に納得が出来る答えを期待していたわけではないが、ここまでおかしな答えだとは思いつかなかった。この世のどこにじゃんけんに勝つ方法が、女神が見えるからだと言う人間がいるだろうか？ いや目の前にいるのである。この様な変な事を言う人に出会った場合どう対処すればよいのだろうか。

「まあ、わしの生まれ持った才能やな。女神が見えるうちは、負けないのや」

絶句している私を見て爺は説明した。いくら説明しても理解できるものか。そもそも理解する気などないが。

「おい、爺。訳の分からないことを言うな。この世のどこに女神がいるって言うのだ」

「じゃあ、天使かもしれんな」

「俺が言いたいのはそんなことではない。目に見えないものは存在しないのだ。よって女神だろうが天使だろうがこの世に存在せんのだ」

あまりにも大きな声を出したので、通りすがりの女性が心配そうに見る。

「だから、わしには見えるんや。だから、存在するんや。そうでもせな、わしがじゃんけん勝ち続ける理由が説明できんやろ」

「確かにそうだが……」

なんだか分からないが、爺の説明に反論できない。女神？ 天使？ なんじゃそりや？

「じゃあないな、ワシがエンジェルを坊主に見せてやるう」

天使がいつの間にか、エンジェルになっている。どうやら爺の天使とやらは、西洋からの使者の様だ。もしくは痴呆の世界からの使

者だろうか。

しかし、見せるとは一体どうやるのだ。

さっきのじゃんけんでは見えてなかったではないか。心がきれいな人しか見えないとか、そんなメルヘンチックでご都合主義な理由があったりして。そんなわけない。目の前に存在する動く骸骨の心はどう見ても煤汚れている。

「はよ、ついてこんかい」

気がつくと、爺は改札の方へ進んでいた。

私はここにおいても何もする事がないので、爺について行く。しかしながら、私の天使、つまり私の一目惚れの相手、愛しのエンジェルへの思いに爺のエンジェルが優った訳ではない。そんなことは当然だ。

ただ私は、この場を離れなければ、彼女と出会う確率が上がらないと思っただからこそその行動である。

しかし、爺のエンジェルとやらに全く興味がないと言えば嘘になるだろう。

## 第11幕 笹本太郎

「おい爺、俺は決して、女神か天子かエンジェルか知らないが、信じた訳ではないからな」

改札を通って、階段を降りようとしている爺の禿てしまった後頭部に向かって叫ぶ。爺はふんつと鼻を鳴らして降りて行く。

爺は老体であるのにすっかりした足取りで駅構内を進み、そしてそのまま東出口から出る。日差しが眩しく思わず目をつぶる。

そして、人ごみの中をずんずん進んで行く。私は小さな爺を人ごみで見失わないように、必死で寂しき後頭部から目を離さないように努める。

爺の頭を見つめ続けて五分程たった頃だろうか、爺は急に歩みを止めた。急に止まったのもだから私は爺に思いっきり突進し爺を転倒させた。

「何すんねん！」

「すまん。爺が急に止まるものだから、ぶつかってしまったのだ」

私の言葉を聞いて、なんやそれとぶつぶつ言いながら爺は起き上った。

「着いたで、わしの天使を見せてやる」

「ここは？」

「ここはパチンコ店や」

「そんなのは分かっている。なぜパチンコ屋なのだ？」

「わしの天使はパチンコ屋にも出るんや。正確に言えば賭け事場に出るんやけどな」

まったく意味は分からないが、とにかくパチンコ屋に入れば何かしら答えは出るだろう。私の天使もこの中にいるかもしれない。いや、彼女に限ってそんな事はないだろう。しかし、この世には予想だにしないことが時に起きる。では行こうではないか。いざパチンコ。

こうして私は、騒音とたばこの煙が充満する店内に踏み込んだ。店内は平日の昼過ぎだと言う事で客はまばらだった。そんな時間であるのに関わらず、学生らしき若者とトラ柄の服を着たババアに交じって座っているサラリーマンは一体何なのだろう？

ちなみにどうでもよい事だが、大阪のババアは最強である。と私は常々思っている。奴らはトラ柄の服を戦闘服の様に着込み、時には群れをなして街中をうろつく。

目的達成の為に手段を選ばず、定価が決まっている商品まで値切ろうとする。そして、何よりも噂話を好物とし、自分の事を棚に上げて他人の上げ足を取る。

この前など、私に向って自転車で突っ込んでおきながら、自転車が壊れたらどうしてくれる、などと戯言を言ってきたものだから、閉口してしまう。どうして反論しないのだ？ と思われるかもしれないが、それは実体験のない人が言える話で、あの迫力に立ち向かえるの者はそういないのである。おそらく、奴らは全盛期のマイク・タイソンよりも強いと思われる。

そんな事を思いながら、床に置かれたドル箱に気をつけ私と爺は奥へと進んでいく。

老人が止まったのはちょうど真ん中あたりであった。

「よし。お前はここで打て」

「しかし、金がないのだ」

そう、私は確か二千円程しか持っていないはずだ。確かめるべく財布を見たが、やはり千円札が二枚と硬貨が数枚入っているだけだ。「大丈夫や」

財布を覗き込んだ爺は口を半開きにして言った。しかし、普通の場合に二千円でパチンコをして当たりが来ることなどまずない。ものの三十分で無くなってしまうのがオチである。

だがこの時、一種の自棄の様な状態になっていた。だから私は素直に席に座り、財布から折れ曲がった千円札を取り出して右上の投入口に入れた。老人はと言うと私の横に立っている。

「爺はやらないのか？」

「わしもそのうちに始める。せやけど、まだその時期じゃないよ  
や」

よく分からないが、いちいち聞いてもらちが明かないのでさっそ  
く始める。

パチンコの玉は下から発射されて、釘に当たりながら進路を変え  
て落下していく。そのうちの何個かが真中の口に入り、そして画面  
上のスロットが回転する。このスロットが揃えば当たりなのだがま  
ず当たらない。そもそも当たらないからこそ、パチンコ屋は儲かる  
のだ。

ところが、突然画面が変わり、様々なテロップが流れだした。パ  
チンコはこの様な演出によって確立が変わる。私もパチンコをやる  
人間だから分かる。今はかなり当たりがくる確率が高い状態だ。し  
かし、いきなり一回目で当たる筈がない。しかし……

淡い期待を持たながら画面を凝視した。そして派手な演出が終わり  
止まったスロットは、やはりバラバラではずれだった。

やっぱりそうだよな、とため息を吐いていると、突然画面が光り  
出した。そして再度スロットが回り始め、今度は何と同じ数字がそ  
るって止まったのである。

もはや、これは奇跡としか言いようがない。軽快な音楽と同時に  
下から玉が放出される。

驚きを隠せず、爺を振り返る。爺はしてやったりとういう表情を  
浮かべている。

「ほら、言ったやろ」

「なぜなのだ？ こんな事まずあり得ない」

「その台に天使がおるんや、それが理由や。おっと、わしはそこで  
打ってくるわ」

そう言って私の五つ左の今ちようど空いた台を指差し、そして移  
動していった。

私は再び台に体を向けて、レバーを持つ右手に力を入れた。



それ以降も私の台は当たり続け、私の横にはドル箱の山が出来ていく。

「もう終わりや」

爺がそう言った三時間が過ぎていた。私はその時何度目かの大当たりを終えた直後であった。爺の台を見ると私と同様にドル箱の山ができている。

「終わり？ もう少しやればもっと儲かるはずだ」

「あかんあかん、今日はここまでや。お互いこれ以上稼ぐのは無理や」

「しかし……」

「ええから、言う事を聞くんや」

そう言われて、私は素直に引き下がった。私たちは店員に玉を集計させて換金させ、お互いの成果を店内の喫茶コーナーでまずいコーヒーを飲みながら発表した。

結果は私が七万円、爺が五万円。この短時間でこの成果はもはや奇跡としか言いようがない。

「爺これは凄いではないか」

私は興奮して爺に向かつて叫んだ。

「こんなの当たり前や。なんたって天使がついてるんやからな」

「そもそも、爺。お前が言ってる天使とは一体何なのだ？」

やっと先々からの疑問を口にした。

「天使って言ったら、天使や。女の人でな、白い服着てふわっと浮いてるねん。ほんでパチンコやったら、当たりが出る台の上に座ってるねん」

「と言う事は、爺は運がいいとかではなく。当たりの出る台が分かると言う事か？」

「そうや。だから、途中で止めたんや。天使が見えんくなったら、そこで当たりは終わりや。だけど、それさえ分かたら十分すぎるやろ」

「確かに、それはすごい能力だ」

本当に天使が見えるかどうかは未だ疑いが完全に払拭されないが、爺が実際に当たり台を的確に見分けることが出来る事は本当の様だ。「それなら爺は相当の金持ちなのだな」

「しかしこの能力には欠点があるんや、まず必ずしも天使が見えるわけやない。天使は気まぐれなんや。見えるときは確実に勝てるが見えないときの方が多し。そしてこれは予測できない。だから頻繁に賭け事の場所に通うんやけど、賭け事の場には不思議な魅力があつて、天使が見えないときでも賭けてしまつて負けるんや」

「それだつたら、普通のギャンブラーと変わらぬではないか」  
全くもつてその通りである。

「まあ、見えないより見えた方がええやろ」

「しかしながら、今日のじゃんけんはどうなのだ？ あれにも天使が見えるのか？」

「そうや、手を出す前に何を出そうかかんがえるやろ。その時勝てる手を想像した時に、天使が見えるんや。今日は調子がいいみたいやから、ついつい長いことやつてしもうたわ」

「そうなのか……多少理解しがたいが、爺がそこまで言うのなら信じてやつてもよいな」

「そう言うことちや」

爺は嬉しそうに笑い、さあ行くか。と立ち上がったので、私も一緒に立ち上がり外に出た。

ドアから出た瞬間に騒音とたばこの煙の空間から解放されて、そこで初めて私はとても疲れている事に気がついた。

## 第12幕 いわし

私は早足で駆けていくいたちを、見失わないように後を追いかける。そうは言っても長身の彼女は、人ごみの中から頭一つ飛び抜けているため見失うことはないだろう。

いたちは茶屋町からかっぱ横丁に渡る為の交差点を信号無視してずんずん進む。これにはさすがの私も仰天したが、意を決しついていく。

それにしても彼女にとって、ロッカーを開けるといふ行為は、こんなにも興味を惹かれ、そしてこんなにも急がなくてはいけない事なのだろうか。

しまいには、急げ急げとせかしてくる。私は、はあはあと息を切らしながらついでに行く。

そして、先ほどの鍵入りの箱を発見した場所。つまり私が万引き未遂を犯した場所を通過し、駅に向けて駆けて行く。

途中、何度か細い路地を通り、通行人には幾度となくぶつかつた。それに比べていたちはこの道を普段から使用しているのだろう。路地をすいすいと通り抜け、人の波をまるでアメリカンフットボールの選手のようにすり抜けていく。

あつと言つ間に私たちは駅構内に辿り着いた。

「おい、いわしについて来ているか？」

いたちは振り返つて言う。

「……ちゃんと後ろにいますよ。いたちさん、なんで走って行く必要があつたのですか？」

息を切らしながらなんと最後まで言い切つた。

「そんなの決まっているだろう。早く行かないと誰かに取られちまうだろう」

「だって、ロッカーに入っているのですよ。それに鍵は私たちが持っているし」

「兎に角だな、早く行かないとなくなるかもしれないのだ」

なんじゃそりゃ？ こんな人通りの多い所でまさかロッカーが荒されたりするとも言うのだろうか。

そんなこと絶対はない。

「この世に絶対という言葉は存在しないからな」

いたちは私の心を見透かしたように言った。私はそう言われて、ソウデスネと心なく返事をするしかなかったのは言うまでもない。

さて、問題はそのロッカーがどこにあるかという事だ。阪急梅田駅はとても大きな駅で、二階、中二階、一階と言つ具合になっており各フロアにロッカーが設置されていたように記憶している。もしかしたら、地下のショッピングモールにもあつたかもしれない。

「さあ、どこのロッカーでしょうね？」

「中二階だ」

いたちは即答した。

「なぜ？」

私ができるように尋ねたのは当然であろう。

「野生の勘だ」

いたちはにやりと笑い。そしてくるりと後ろに向き直り再び走り出した。

またか、とうんざりしつつも後を追う。もちろん全速力で。

私たちは梅田構内の大画面テレビを横切り、そして階段を駆け上がる。それにしても何故走っているのだろうか。

中二階のロッカー前に辿り着いた時には、額から汗が噴き出していた。いたちを一瞥すると彼女は涼しい顔でロッカーへ歩み寄っている。一体この変態化け物はどんな体力をしているのだろうか。

いたちはロッカーの前に立ち、ろくに番号も確認せず鍵を鍵穴に突っ込んだ。そしてその鍵を回し、鍵はガシャと音をたてて解除された。

「それも野生の勘つてやつですか？」

私はたまらず尋ねる。

「そうだ」

「私たちは扉をゆっくり開けながら言った。これはなかなか馬鹿に出来ない勘だ。」

「お、入っているぞ」

「そう言つて、ロッカーに手をつ込み何か白い物体を取り出す。」

「それは封筒だった。手紙にしては少し厚みがある。中身を確認して笑みを浮かべている私たちは、その封筒を私に渡した。」

「恐る恐るその中身を見る。」

「なんと中に入っていたのは金だった。しかも一万円札が十枚ほど。驚いていたちを見る。」

「なかなかの収穫だな。数えたところ十二万ある。なあ来てよかつただろう?」

「いたちは笑いながら言う。私は今になって自分の行為が恐ろしくなつてきた。」

「人のロッカーを勝手に開けて、中身を持ち去るなど正気ではない。もしかしたら誰かに見られているかもしれない。」

「そう思つて辺りを見回すが、特にそのような人はいないようだ。」

「ちよつと、これはまずいですよ。戻しましょう。鍵ももう一度返してなかつたことにしましょう」

「いわしよ、何を言っている。これは見つけたものが手にしている金なのだ」

「そんな理屈が通じるはずないでしょう。これは立派な犯罪ですよ」

「万引き犯がよく言う」

「返す言葉が見つからない。」

「だけど、十二万も盗るのはまずいですよ」

「お前はマスクのライヴが見たいのだろう?」

「彼女は突然な話のベクトルが変わつて、驚いてしまう。」

「まあ、そうですけど、それとこれとは全く関係ないでしょう」

「いや、関係ある」

「そう断言する私たちの思考が、全く分らない。」

「どう関係あるのですか？ ちゃんと説明してくださいよ」

「つまりだな、お前はマスクのライブに行きたい。そうだろう？」

「はい」

「でも、チケットを持っていない」

「そうです」

「そして、そのチケットは既に完売しているだろうと思われる」

「おそらく、そうです」

「では、残る道は一つだ」

「なんですか？」

「チケットを買収するのだ。この金で」

「私たちは当たり前だろう。という顔で言う。」

「そんなこと……」

「そんなことできない？」

「そうですよ……」

「お前のマスクへの情熱はそんなものなのか」

「なぜか私たちは心底失望したというような声を出した。私はその返答に心底怒りを覚えた。」

「あんたは知らないだろうがな。私はマスクが好きで大阪の大学まで来たんだぞ。バイト代もほとんどライブに費やすし、友達の誘いだって断る。とにかくマスクへの情熱は誰にも負けない」

「気がついた時には、大声で叫んでいた。周りの人たちが私たちに注目して恥ずかしい。けど心はすっきりした。こんなに大声を出したのはいつ以来だろうか……」

「いわしの情熱は分かった」

「それは良かった」

「では、この金はありがたく頂くとするか」

「勿論です」

もう訳が分からない。どうにでもなってしまう。

私たちは財布に金をしまう。

そして、今度は封筒の中に何かを入れた。

「それは？」

「金の持ち主へのちよつとしたプレゼントだよ」

「プレゼント？」

「そうだ、貰つてばかりだと悪いからな」

「じゃあ盗るなよ。と喉まで出かけたがなんとか飲み込んだ。」

それにこの時私は、もしかしたらマスクのライブに行けるのではないかという淡い期待に胸を膨らましている。

「では、戻しに行くか」

「戻す？」

先ほどから聞き返さないと、分からないことが多すぎる。

「鍵を元の場所に戻さないと、私のプレゼントが彼か彼女か分からないが、受け取ってもらえないだろう」

確かにその通りだ。そもそもプレゼントなどあげる必要があるのだろうか？

こうして私たちは、本屋に戻り、私が店主の気を引いている間に、いたちが箱を元の場所に戻し、また二人で歩きだした。

### 第13幕 いわし

目の前のレモンサワーを眺めながら、私はなぜこんな所にいるのかと考える。目の前にはもちろんいたちがいて、彼女は今まさにビールを飲み干そうとしている。

コインロッカーから、十二万円もの大金とねこばばした私たちは梅田駅を出た。

そして、人通りの少ない場所で立ち止まり、興奮と後ろめたい気持ちが入り混じった私は、先ほどの金が入っているであろう、いたちのポケットを一瞥し、そしていたちの顔を見て、ため息をついた。「マスクのライブの会場はどこか知っているのですか？」

私はいたちに尋ねる。

「もちろんじゃないか。会場はここから十分ほどのディスティネというライブハウスだ」

「そのライブハウスなら何度か言った事があります。あとはチケットですね」

ライブの話をする、私の中の罪悪感は霧が晴れるようにすつと体のどこかに消えてしまっていた。

「こちらには十二万円もの大金がある。ライブにそんなにファンでない奴もいるだろうから、そいつから一万も出せば買い取れるだろうよ」

「確かに、一万円も出せば売ってくれる人はいるでしょうね。ライブの開始時刻は？」

「たぶん、午後の八時だ」

「八時か……まだ時間がありますね」

八時までは、まだ三時間ほど時間がある。

「そうだな、ライブには体力がいる。腹ごしらえでもしようじゃないか」

「私たちはそう言って、私の腕を引っ張った。」



こうした経緯で私は、いたち御用達らしい呑み屋に連れてこられ、レモンサワーを眺めている。

いたち御用達の呑み屋、「神戸」は大阪にあるのに神戸という珍妙な名前もさておきながら、店のたたずまいも非常におかしなものである。

まず店への入口が異常なほど小さい。高さが百二十センチほどで、毒キノコ様な赤い色をしている。そして中に入ると、店がとても縦長である。正確な長さは分からないが、学校の廊下ぐらいはあるのではなかるうか。店の構造は右に一直線の長い通路があり、その左側にこちらにも一直線に掘り炬燵が並んでいる。

今まで見たことのないような作りであるが、不思議と心を落ち着かせる空間である。

店はなかなか繁盛しているようで、席の半分は埋まっており、細い通路を着物の従業員が酒や食べ物運んでいる。

この店に入って最初に気づくのが、店の中に満たされているフルーツの香りである。それも一種類の香りではなく様々なフルーツが混ざった匂いだ。

「いたちさん、この香りはどこからするのですか？」

「この香りかい。これは水煙草の香りさ」

「水煙草ですか？」

「いわしは水煙草を知らないのか、水煙草ってのはあれだ」

そう言つて、いたちは手前の掘り炬燵の上に乗っかっている。八十センチ程の筒のようなものを指した。それは筒の下に水が溜まっており、細長いチューブの様な物を吸う度に水からぶくぶくと泡が出てくる。そして口の中から煙を吐いているところを見ると、やはり煙草なのであろう。

「あれはどの様な仕組みなのですか？」

「あれはだな、まず筒の上に木炭を置くのだ。そして、その下に果物の香料を置く。そうするとあのチューブを吸った時、木炭の煙が香料と一緒に下まで降りて来て、一度水中を通り口の中に入るのだ」

「そうなんですか、水煙草なんて初めて見ましたよ。水の中を通すと理由はあるのですか？」

私がそう尋ねると、それはね。と後ろから声がした。私は驚いて振り返ったが誰もいない。

確かに声が聞こえたのに、と私が訝っていると、いたちが私の下を指差した。

すると、そこには百三十センチ程の男性が立っている。その男性は背が低いと言うよりも、頭、手、足など全てが小さい。だから体がそっくりそのまま縮小された感じと表すのが適当であるように思える不思議な体をしていた。

「やあ、いたちさんお久しぶり」

小さな体から発せられる声は意外に大きくはっきりしていて聞き取りやすい。

「ご無沙汰だなマスター。今日は友人を連れてきた。いわしだ」

「どうもこんにちは、いわしです。とても落ち着くお店ですね」

「いやはや、そう言っていただけとありがたいです。なんせこの掘り炬燵は私が作った自信作です。入ってしまったえばそこは極楽です」

ほほほ、と笑いながらマスターは話す。掘り炬燵を作るとはマスター兼炬燵職人なのだろうか。それも変な話だ。

「そして」

マスターはもちろん忘れてはいないと言わんがばかりに続ける。

「そして、もう一つの自慢が水煙草です。これは中東のものでして、器具はトルコから輸入したものです。さすがにこれは作れませんので、ははは。先ほどいわしさんが何故、水を使うのかとおっしゃってましたが、これには理由があるのです。煙草のニコチンとタールは水に溶ける性質を持っています。ですので、一度水に通すことによつてニコチンとタールをろ過することができます。まあ完全にろ過はできませんがね。ははは」

「なるほど」

「ささ、どつぞお座りください」

私たちはマスターに誘導され、ちょうど真ん中の掘り炬燵に座る。足を入れた瞬間にマスターが極楽だと言った意味が分かった。これはどうにも、気持ちが良いすぎる。出来る事なら一生この中に足を入れて暮らしていきたいとさえ思える。

いたちがマスターに生中二つと叫んだので、即座に私の分をレモンサワーに変更する。いたちは少しむっとした顔をしたが何も言わなかった。

私は横の席に置かれている、水煙草の水から出る泡を注意深く観察する。

そうしていると、着物を着た女性がビールとレモンサワーを持って立っていた。私たちはそれを受け取り。

そして、いたちは一気に飲み干し。私は一体何をやっているのだろうと思いにふける。

## 第14幕 いわし

「水煙草はいかがですか？」

横を見るとマスターが立っている。掘り炬燵に座っていても私と視線はそれ程変わらない。

「おい、マスター。例のものはあるか？」

「私たちはビールジョッキをどんと机に置き、ぶつきらぼうに尋ねる。」

「いたちは本当に運のいいお方だ。今日の朝に入荷したばかりなのでしょ」

「ほほう、それは運がいい。この前は品切れだったからな」

「申し訳ないです。しかし、その苛立ちを物にぶつけるのはやめていただきたいですよ」

そう言つて壁を触り、ここに穴が空いたのですよ。と苦笑いした。今の話の流れだと十中八九いたちが壁に穴を開けたのであろう。

「脆い壁がいけないのだ。少し小突いただけで穴が開くのだから困ったものだ。それにきつちり弁償しただろう」

「そうです。お金はちゃんと頂きましたし、何も文句はありませんよ」

マスターはそう言い、両手を上げて降参のポーズをしながら下がっていった。その背中に向かっていたちはもう一杯と大声で叫んだ。「例のものとは一体何なのですか？」

先ほど、いたちが注文した例のものの正体が気になって尋ねる。

「水煙草だ。でも少し特別なのだ」

「特別？」

「そう。水煙草には果物の香料を使用するのは説明しただろう。その香料が特別なのだ」

「そう言いますと？」

「詳しくは知らぬが、どうやらいろいろな果物がブレンドされていて

るらしい。とても美味しいぞ」

煙草を吸う真似をしながら言う。そして、水煙草よりも一足早く運ばれてきたビールに手を伸ばし口に運んでいる。

水煙草は私が思っていたよりもすぐに運ばれて来た。大きな形をしているから、きつと準備も大変であろうと思っていたがそうではないようだ。マスターはその小さな体からは想像もできない程の力の持ち主の様で、大きな水煙草を片手で支え、反対の手でチューブを持ちながらやって来た。

「お待たせしました。いたちさん、これはなかなか上物ですよ」

私たちは満足そうに笑い。御苦労とマスターに言った。

「いわしさんも楽しんでください。この水煙草は特別なので吸い過ぎにはご注意ください」

「吸い過ぎると危険なのですか？」

私は驚いて尋ねる。

「普通の水煙草は、煙草と大差ないです。むしろ、ニコチンやタールの量が少ない為、健康には煙草よりもいいです。しかし、この香料は特別です。体に害はありませんが、酔いに近い状態になります。まあ酔いとは違うのですが、それは吸ってからの楽しみと言う事で」

「それはもしかして、ドラッグってことですか？」

「いいえ、いいえ、いいえ、断じて違います。ドラッグなどでは断じて違います」

マスターは短い手足をばたばたとさせて、否定する。まあこんな所で堂々とドラッグを販売している訳もないだろう。ひとまず違法ではないと言う事が……

私とマスターが話している間にすでに私たちは吸い始めている。彼女はぼこぼこと大きな水疱の音を立てながら吸い込み、ゆつくりと煙を吐いていく。

「ほほう、マスター。これはなかなかではないか。以前より段違いで良い」

「そうでしょう。ここまでいいのは年に一度あるかないかですよ。いたちさんの様な常連さんにしかお出ししていないのですよ。では、楽しんでください」

そう言っつてマスターは戻って行く。その背中に向かつて、生一丁と叫んだのは言うまでもなくいたちたちである。

「どうなのですか？ 一体どんな味なのですか？」

私はたまらず尋ねる。

「百聞は一見にしかず。まあ、吸ってみたまえ」

そう言っつて、いたちは私にチューブをよこす。私はおっかなびつくりそのチューブを持ち、そつと口に運ぶ。少し吸い込もうと試みたが何も口に入つてこない。それを見ていたたちがもつと思いつきり吸え、と言う。今度は思いつきり吸いこんでみる。するとごぼごぼと音をたてて煙が水を通り、そして私の肺にまで入つて来た。煙は喉を焼くような感じもなく、とてもクリアだ。一言で言っつてしまえばとても吸いやすい。

煙が肺を満たし、しばらくするとポツと体が温かくなつてきた。そしてはき出す煙はとても芳醇な香りがする。その香りは様々な果物の香りがするのだが、自然と統一されていて、まるでそのような果物があるかのようにさえ感じられる。少ししてから、口の中に暖かく甘みのある味が広がつてきた。私が今まで食べたどんな果物よりも甘い。

「いたちさん、すごく美味しいです」

「だから言っただろう。これは特別なのだ」

「でも、マスターが言っつていたような効果はないですよ」

「そんなにすぐに効くものではないさ、人それぞれだし、何も起こらない人もいるらしいぞ」

「そうなんですか、それにしても美味しいです」

「マスターも言っつていたが、こんな上質な物はなかなかない」

そう言っつて、もう一度吸い込む。あまりの美味しさに体中の力が抜けるようだ。先ほどと同じように吐き出した煙を消えて行くの目

で追う。

「いつまで吸っているのだ、早く渡したまえ」

「私たちは待ち切れないとばかりに私に言う。わたしはそれに従い  
チューブを渡した。」

その瞬間、私は違う場所にいた。

## 第15幕 西久留米田恵

私がいる場所、それは大阪のアメリカ村だった。小さな店舗が集まるこの場所は若者たちであふれている。

空は曇り、風が強い。私はすぐに思い出した。ここが一月前のアメリカ村であることを、そしてこの後すぐに私は酷く傷つくことも同時に思い出した。

それはまるで夢の中で、これは夢である、と気がつく感覚に似ていた。実際、私は眠っていて夢を見ているのかもしれない。あの不思議な居酒屋で飲み過ぎたのかもしれない。そんな事を考える事が出来るほど意識はすっかりして冷静だ。

人通りが多い道にいるのに人と体が接触しない。なぜ皆は私の事をそんなに避けているのかと思っていると、前方から一人の男性がやってくる。その男性を避けようとしたが間に合わず体がぶつかると思ったが、男性は私の体をすり抜けて通り過ぎて行った。どうやら私はこの世界では幽霊のような存在でいなくてはならないみたいだ。しかし驚きはしない。

私は人ごみをすり抜けながら、中央にある三角の形をして公園を目指す。これが一月前と同じであるなら私はきつとそこにいるはずだ。

公園まで全速力で走った。それなのに息は全く乱れていない。現実ではないから当然か。そして、やはり私、つまりこの世界の私は公園に座っている。もうすぐ大学の友人が私と合流するだろう。

私は携帯電話を取り出し通話を始める。すこし辺りを見回してからこちらを見つめ、手を振る。姿が見えているのかと一瞬驚いたが、背後にも同じく通話している友人がいる事に気づく。

彼女は伊藤麻衣、私と同じゼミを取っており、音楽の趣味が似ていて私の数少ない友人の一人だ。この日は彼女とここで買い物をする為待ち合わせをしていた。麻衣は雨を心配して赤い傘を持ってい



る。私が手を振っているのに気が付き、遅れてごめんね、と笑いながら駆け寄ってくる。何から何まで一カ月前と同じだ。

二人は少し立ったまま談笑した後歩き出す。そして公園から北の方に数分歩き、ファーストフード店に入っていく。たしか私も麻衣も昼食を取っておらず、腹が減っては戦は出来ぬ、などと言って食事にする事になったのだった。

店に入ると私はすぐにフィッシュバーガーのセットメニュー注文する。それに対して麻衣はなかなか決められずにメニュー表を睨んでいる。そして、恵は男みたいね、と笑う。そうだ、私の名前は恵だった。今日はいたちに、いわし、いわし、と連呼されて本当の名前を危うく忘れるところだった。私は声を殺して、くくくと笑う。誰にも聞かれる心配はないのに。

ようやく注文を終えた麻衣は会計を済ませ、すぐに出てきたハンバーガーとドリンク、ポテトを持って私と共に席を探す。よく見ると私と同じフィッシュバーガーセットだ。

店内は混みあっているが、なんとか席を見つけ席に着く。麻衣に煙草吸っていい？ と尋ね、了承を得て煙草に火をつける。体に悪いからやめなよ、と言う麻衣に笑いながら、最近彼氏と上手くいっているの？ と返す。彼女の交際は順調なのは知っている。これは女の子の社交辞令の様なものだ。

そうだ、ここまではとても楽しかった。そして何一つ問題はなかったのだ。どうしてまた嫌な思いをもう一度しなくてはいけないの？ それでも私が干渉することのできないこの世界は進み続ける。

食事を終えた私たちは紙屑を屑箱に捨て、トレイを戻し店の入り口に向かって行く。ここからだ、最悪なのは、自然と体が強張り血の気が引くのが感じられる。全身の毛穴から血液が気化していくようだ。

店を出ようとした瞬間、前から一組の男女がやってきた。ついにこの瞬間が来てしまった。

「和也……」

私は思わず名前を呼び絶句している。彼、和泉和也は私の彼氏だ。いやもう今現在は連絡も取らないようにしている為、彼氏ではないだろうが、ここではまだ彼氏だ。彼とは同じ大学ではないが、他校同士が集まるサークルで出会い、お互いに気があり付き合い始めた。たぶんそのはずである。そのサークルも今現在は参加していないが、ここではまだ参加している。なんだかややこしい。

その和也の右手には、サークルに新しく入って来た新生の左手が握られている。もちろんこの瞬間に私は、あ、この子は確か新しくサークルに入って来た子で、可愛いが女の子にはすこぶる評判が悪く、私の嫌いなタイプだな。名前は覚えてないな。なんて悠長なことは考えていなかった。ただただ頭は真っ白になり、呆然と繋がれた手を見ていた。

店内は賑わいでいるはずなのに、まったく音が鼓膜に入っていない。そして和也も目をきよるきよるさせ、無言のまま立ちつくしている。

麻衣はどうしたら良いのか分からない様子で、私の裾を引っ張りながら、え、え、え、え、と言いつづけている。和也と手をつないでいる彼女は私の顔を見て少しニヤリと笑い、和也の腕を組んで体をくっつける。当時は分からなかったが、おのおのがこの様な反応をしていたのかと、今見て初めて分かる。そして、この後に私は耐え切れず逃げ出すのだったな。

この時、逃げ出しなどしなければよかった。どうせなら、和也のあの呆けた頬でも殴り倒してしまえばよかったのだ。そうすれば、この後も頭の中に重い暗雲のような気持を抱えずにすむだろうし、この場合私にはこの男を殴る権利がある、と思う。

そうこうしている内に、耐え切れなくなった私は逃げようとしている。恵、そう叫ぶ麻衣の声が聞こえる。

私は反射的に手を伸ばし、肩をつかもうとする。肩に私の手が触れた、その瞬間。私の体はすうっと、逃げようとしている体に重なる。そして完全に私と私の体はすべての感覚が一つになる。

そして、体を手に入れた私は即座に振り向き、和也の方に向き直す。今度は地面をしつかりと踏む感覚も麻衣が裾を引つ張る力も感じる。そして右手を後ろに引き、ぼうつとしている和也の頬を思いつきり拳で殴りつける。右拳に鈍い痛みが走る。彼は左頬を手で押さえて目を丸くしている。

どうやら、私の期待するほどのダメージは与えていないようだ。それはそうだが、私はこれでもけんかなど一度もしたことがないか弱い女の子なのだ。そこで、今度は左手で服の首を掴み、鼻めがけてもう一度拳を下ろす。右拳に、みしりと鼻の柔らかい骨の感触が伝わり、彼の鼻からは血が噴き出した。彼はそのまま地面にしゃがみ込む、そしてその後頭部にお気に入りの赤いバツクを振り下ろす。彼は、うんぎゃあぁ、と聞いたことのないような悲鳴をあげ、その場に倒れ伏す。

それを見ていた、和也の横にいる彼女は悲鳴を上げた。私はすぐさま彼女の頭を掴み、ぐいっと顔を持ち上げもう一度拳を振り上げる。彼女は再度悲鳴を上げ、恐怖のあまり目を堅く閉じ、泣きながら、ごめんなさい、ごめんなさい、と連呼している。

私は彼女の鼻を軽く、中指でピンと弾くと、彼女は殴られたと思っただのか、呻きながらその場に座り込んだ。

そんな彼女を見て、私の高揚していた心も自然と落ち着きを取り戻し、心もすつきりと軽くなってきた。

すると、どこからか白い煙が足元を包む。その煙はどんどん周りを包んで行き、しまいには視界の全てが白くなる。その煙は甘い果物の香りを漂わせている。もう麻衣も和也もサークルの後輩もファーストフード店も何も見えない。あるのは甘い香りだけ。

「し、いわし、おい」

突然、声がして、はっとする。辺りを見回すと低い扉が右手に見える。どうやらここはアメリカ村ではなく、居酒屋神戸の入口のようだ。

## 第16幕 いわし

「いわし、大丈夫か？」

「いたちはそう言つて、私の肩を軽く叩く。」

「あ、はい。私はどうしてここに？」

「そんなこと、私を知るものかい。いわしが、ふらふらと出て行って、なかなか帰つてこないものだから、探しても店内にいないし、外かな、と思つて出てみるとそこにいたのだ」

私を指さして言つ。

「あ、そうなんですか……でも、私はアメリカ村に」

「アメリカ村？ おいおい、ここは梅田だぞ」

私を指した指で額を小突かれる。

「私は一体どのくらいここに？」

「うむ、大体一時間と少し経つたぐらいだな」

「一時間も！」

私は驚愕する。おそらく私がアメリカ村にいたのは夢の様なものだろう。それにしてもそんなに長い時間だったとは驚きだ。

「いい夢は見れましたか？」

その声を聞いて初めて、私のすぐ横にマスターがいる事に気がついた。

「あの水煙草の香料は特別でリユーヤと言います。意味はトルコ語で夢」

「夢ですか……」

「そうです。リユーヤを吸った者は夢を見ます。夢がどのようなものか、毎回違うものですし、深い夢もあれば浅い夢もあります。いわしさんの場合は深い夢だった様ですね」

マスターはふつと笑みを浮かべる。そして、どうでしたか？ と加える。

「なんだか、すっきりすると言うか、吹っ切れたと言うか、何と言

うか。でも、心の霧が晴れたような気分です」

本当に先日までの心の鬱憤やらが綺麗さっぱりなくなっている。そして右手で握り拳を作る、そこには僅かに和也を殴った感触が残っている気がする。その感触を確認すると、あれは本当に夢の事だったのだろうかと思う。その拳を見ていたちは、おいおい暴力はダメだぞ、と大げさな声を上げる。

「いたちはどんな夢を？」

私は尋ねる。

「おいおい、人の夢を詮索するなんて野暮なことは止しとくれよ。夢はその人だけのもの、共有する必要なんてないものだ。心にとどめているからこそ夢は夢のまままで存在できるのだ。それにいわしだって、見ていた夢を私に語りたくはないだろう」

「まあ、そうですねども」

確かに自分の夢は語るものではないな、それにしても、いたちもたまには良いことを言うものだ。

「ところで、いたちは私は私が外にいる間は何をしていたのですか？　もしかして一人でずっと飲んでいたとか……」

「ちよつと一勝負があつてな」

「一勝負？」

「そう、一勝負」

そう言つて、力こぶを作る。あれは、なかなかの勝負でしたね、と言つてマスターは口を手で覆い笑う。

「一体何があつたんですか？」

そう尋ねる私を、いたちは、まあまあ大したことではないさ、と軽くかわす。

「それよりも、もうすぐライブ会場に行かないとチケット手に入らないぞ」

「あ！」

大声を出したので、道行く人達は何事かと私の方を見る。声がかい、と頭を叩いたのももちろんいたちだ。

「早く、行きましょう、早く。マスター、会計をお願いします」

そう言つて、財布を鞆から出そうとする私の手をいたちは制する。

「私が払うからいいさ」

「でも、私も飲んだし」

「年上に少しでもいい恰好させなさい。それに金ならたんまりある  
いたちは懐から、先ほどの十二万をちらりと私に見せた。」

「それは、人の金でしょう」

そう一応忠告したが、会計は当然のようにそこから支払われた。

「では、行こうではないか」

私はマスターにお礼と、また必ず来ますから、と言つて、いたち  
とその場を去つた。

それにしてもいまだに残る拳の感触を思い返し、不思議な時間だ  
つたなと再び思い返さずにはいられなかつた。

## 第17幕 笹本太郎

パチンコ店から出た私は、爺と再び駅前まで戻っていた。

「ところで坊主。名前はなんていうんや？」

歩きながら爺が尋ねる。

「そう言えば、まだ名乗ってなかったようだな。笹本太郎だ。爺は何という名前なのだ？」

「爺は止めい。わしは二階堂玄介じゃ。皆にはゲンちゃんとういう愛称で親しまれている大阪の人気者じゃ」

「何がゲンちゃんだ。この骸骨爺が、しかも大阪の人気者とはよく言えたものだ。そのようなこと聞いたことないぞ。玄爺と呼ばせてもらおう」

「好きにしたらええわい」

そう言つて、骸骨爺、改め玄爺は駅の階段をこつこつと登つて行く。幼稚園の子供たちが団体で降りて行くのとすれ違つ。遠足にでも行くのだろうか。一様に手を繋ぎながら楽しそうに会話をしている。玄爺は階段を登り、さらに直進して行く。そして、少し進んだところで突然止まった。

「ここは、コインロッカーではないか、どうしてここに？」

そこには、駅のどこにもあるようなロッカーが設置されている。百円で一日その中に荷物を保管できるものだ。コインロッカーは意外に需要があるのか、八割がた使用中であるようで、鍵が付いていない。

「金をやな、コインロッカーにしまおうと思つてるねん」

玄爺はコインロッカーを端から順に眺めながら言う。

「なぜ、金をコインロッカーに入れる必要があるのだ？ 自分で持つていたらいいだろう」

「まあ、ええやないか、自分で持つておくのが嫌やねん。こんな大金持つてたら盗まれそうやろ」

ああ、恐ろしい、というように両手を上げて話す。その間もコインロッカーから目を離そうとしない。以前にその様な体験をしたのであろうか。

「だが、何もコインロッカーに入れなくともよいではないか。銀行に振り込めばよからう。駅の近くに銀行は沢山あるぞ」

「銀行はあかんねん。運が下がる。なんでわしがコインロッカーにこだわるかと言うとな、ここに金を入れつつたら安全やろうつてのもあるし、その結果、金が増えるようになる気がするねん」

これは、また訳の分からないことを玄爺は平気で話し出す。そもそも、その金の半数以上は私のものである。しかしながら、先ほどパチンコでの快進撃は玄爺あってこそそのもの、その玄爺がここに保管すると金が増えると言っているのだ、一体どうしたら良いのやら。

「玄爺よ、そこには例の天使はいるのか？」

私はコインロッカーのこちら辺に、と手で円を描き尋ねてみる。

「天使は見えへん、これはわしの勘じゃ」

さてどうしたものだろうか、頼みの天使は見えないとの事だが、この爺の勘とやらも馬鹿に出来ない気がする。それにコインロッカーに入れる事に関しては問題ない。

「玄爺がそう言うなら、コインロッカーに入れておこうではないか」  
私がそう了承すると、玄爺はそそくさと金をロッカーに入れた。

「最近胃が悪いんや、だから意に胃にいい。1211にするわ」

そんな事を言つて、硬貨が投入され、中へ落ち込んで行く音が聞こえる。そして鍵を閉める。つらない語呂合わせだ。そのような事を言う人間はこの世に二人といたんだろう。もちろん私は無視している。鍵を閉め終わった玄爺は、よし、完璧や、と言つて番号の書かれたコインロッカーの鍵をポケットに放り込む。

そして、意気揚々とした雰囲気の中、少し跳ねながら階段を下りて行く。私は後を追いなながら、玄爺も大概変な奴だが、同調してしまう私もなかなか変人だなとどこか思った。



## 第18幕 二階堂玄介

「おい、玄爺、どこへ行くのだ？」

その声を聞いて、二階堂玄介は階段を下りるのを止めて振り返る。そこには生意気な餓鬼、笹本太郎が不満そうな顔をして立っている。無精髭を生やし、服装もだらしないがよく見るとなかなか整った顔をしている。わしから見れば頼りないが、今風にいえばイケメンと言っやつだろう。長身の上、階段の段差もあつてかなり頭を上へと向けないと顔が確認できない。

「ちよつと寄るところがあるんや」

「どこに？」

笹本は同じ段まで降りて来て尋ねる。それでも身長差はかなりある。

「ちよつと古本屋に行こうと思つてんねん」

「古本屋？ 古本などいつでもいいだろう。それよりもさつきコインロッカーに金を入れると増えると言つていたがいつ開けるのだ？」

「あほ、何言つとんねん。古本ちゅうのはな一期一会なんやで、今あつたもんが明日もある保証はないねん。ほんで、コインロッカーの事はちよつと待つとれ、開ける時になつたら教えたるさかい」

「古本も例の天使の知らせなのか」

笹本は人差し指をくるくる回し、天使の輪を空中に描く。

「古本は勘や、多分ある」

そう言つと、笹本は、また勘だよ、と不満の様子を呈したが、その後何も追隨してこない様子を窺うとどうやら素直に従うようだ。パチンコ店で大勝ちした事で、わしの勘もそれなりの信用を得たようである。しかしながら、今回は勘などではないが、それは口が裂けても言えない。

梅田駅は先ほどよりも人が増え混雑している。紀伊国屋の横の画面では、多くの人が待ち合わせの為だろうか溜まっており、携帯

やテレビ画面を見ながら立っている。

高架下の細い道を人とぶつからぬ様に歩いて行く。笹本もどうやら後ろからおとなしく着いて来ているようだ。

五分程歩いて、かっぱ横丁の古本通りに到着する。そこで一番初めに目に入った古本屋の扉を開け入る。扉を開けると同時にカビの臭いが鼻につく。すぐに笹本も入り、カビ臭いな、と声を出して文句を言う。店主は我々に気づいていないようで、新聞を読むのを止めない。

「何て言う本を探しているのだ？ 一緒に探してやる」

笹本がそう言ったところで、初めて店主が新聞から目を離し一瞥する。そしてすぐに新聞に目を戻した。

「超古代科学研究読本じゃ、探してくれ」

「変な爺は読む本まで変なのだな」

笹本は、変人、変人、と連呼しながら本を探し始める。

笹本が本を探しに奥の方まで行っている。それを確認し、手元にある小さな箱を手取る。その箱はとても綺麗な装飾がなされていて、実際に値段も高かった。それを確認して、中にコインロッカーの鍵を入れる。

そして、そつと元の場所に戻す。

「おい、玄爺」

そう呼ばれた時は心臓が止まるかと思った。振り向くと笹本が立っている。今の行為を見られたのだろうか。おっかなびっくり顔色を確認する。

「驚いて心臓が止まるところやったわい、なんや？」

「なんやって、こつちこそ何だよ。玄爺が本を探せって言って、見つけたから声をかけてやったのだ。超古代科学研究読本、これだろ」

まさか本が見つかるとは思ってなかった。なんせ本を探していたのは嘘で、本のタイトルも出鱈目に言った。なるほど、手には古く大きな本が一冊持たれており、タイトルにはしっかりと超古代科学研究読本とある。まさかこんな変てこな本が存在するとは。笹本は、

一期一会だな、と笑う。

「あ、本はやっぱり買わん事にしたわ、すまん、すまん」

「はあ？　じゃあ、何の為にここまで来たのだ」

「すまん、て言ってるやろ、よう考えたら今そんなに金も持ってないしやな、本がそんなにでかいと持って歩けへんやろ」

「俺がどれだけ探したと」

そう言っつて、笹本が騒ぐので店主が何事かとこちらを見る。すまん、と平謝りをしてなんとか落ち着かせ店の外に出る。それでも、笹本は、訳が分からない、呆けとは恐ろしい、などとぶつぶつ言っている。

その時突然、携帯電話が鳴った。軽快な着信音が会話を止める。携帯電話の画面で発信者の名前を見て、取るかどうかを躊躇している間に切れてしまった。

「最近の老人は携帯電話持っているのか」

笹本は何か珍しい動物でも発見したかのように感嘆をあげる。

「近頃の老人をなめるんやないで、情報化社会や」

「なにが情報化社会だ。ところで電話に出なくてよかったのか？」

「いや、今かけ直すわ。誰も電話に出んわやな」

笹本は、ん？　と顔をしかめる、どうやら駄洒落が理解できなかったようだ。もう一度、駄洒落を説明する。これほど惨めな物はない。何でもないわ、そう言っつて誤魔化すしかない。

「ちよつと、かけ直すから、お前はちよつと離れておれ」

手をひらひらさせて向こうに行くように促す。

「なんで、向こうに行かねばならんのだ。ここでかけたらよかつつ」

「お前はな、プレビュートと言うものを知らんのか。電話を聞かれるちゆうことは恥ずいことなんや」

「玄爺よ、それを言うならばプライベートだ。少し惜しいが意味が全然違うぞ」

「まあ、どつちやでもええねん。兎に角、一人でテレフォンさせてくれ」

「無理に英語にするのでない。まあ、そこまで言うなら仕方がないな。長電話するでないぞ」

笹本はそう言って、ふらふらと離れて行き、近くの小さなベンチに腰を下ろす。それを見計らって、携帯電話と取り出し画面を見る。日ごろあまり活用しないので、操作に戸惑うかと思っただが、以外に以前の使用方法を記憶しているもので、すぐに着信履歴を見つけ、電話をかける事が出来た。まだまだ呆けててはいない人生これからだ。

電話のコール音が三、四度なり、ぴつ、と小さい音が鳴る。どうやら相手は電話をとったようだ。

「いたちか？」

「携帯電話はその相手にしかかからぬのだよ。久しぶりだな『蛙』。さつきはどうして電話に出なかつたのだ？」

蛙とは電話をかけている相手、いたちが勝手に付けた名前だ。彼女は初対面の相手にあだ名付けたがる癖を持ち、実際に本人の意思は無視してあだ名を付ける。それで、わしは蛙と命名されたと言う訳である。

「さつきはすまん、電話に出れんかつたんや。それにしても、蛙は止めい。わしには二階堂玄介って名前があるんやぞ」

「電話に出んわ。全く。蛙は蛙だ。お前の顔はどこから見ても毛の無い蛙ではないか」

「もともと蛙には毛が生えてへんわ」

その声を張り上げると、もしかしたら笹本に怪しまれるのではないかとそつと見たが、まだベンチに座って前を見ている。何をそんなに熱心に見ているのかと思っただら、道行く女性を見ている。まったく最近の若者ときたら。そんな事を考えていると、ところで、といたちが話を切り替えてきた。

「ところで、そろそろ金を返してもらえらるうな。約束の期限は昨日までのはずだったぞ」

いたちは声のトーンを一つ下げて言う。彼女の声は毎回思うのが、

とても魅力的だ。それは電話越しでも変わらない。しかし今はその様な事を考えている場合ではない。

「今はその事で、電話したんや」

「私が先にかけたのだろう」

「まあ、そうやけど、兎に角、返す金は用意できたわ」

「ほう、十二万きつちりか？」

「そうや、十二万きつちりや」

「では、取りに行こうではないか、蛙よ今どこにいるのだ？」

「今はかつぱ横丁におる。しかし、ちよつと事情があつて、手渡しは出来んねん」

「手渡しが出来ぬとはどういう事だ、おい蛙。それでは受け取れないではないか」

「私たちの怒気の混じつた声が電話から聞こえる。」

「まあ、こつちにもいろいろ事情があるんや、ほんでな、いたちにはちよつと手数かけるんやけど、かつぱ横丁に古本屋があるやろ。その古本屋の、えつと、なんちゅう名前やったかいな？ ちよつと待つてな。そうや、そうや、本本堂ちゅう本屋があるさかい。そこに入って欲しいねん」

「おい、本屋とはどういう事だ、そう言ういたちを制して話を続ける。」

「本本堂にな、入つてすぐの所に綺麗でちつちやい箱があるねん。」

その箱の中にコインロッカーの鍵を入れたさかい、それでコインロッカー開けてくれ。中に金が入つてゐるわ」

早口で一気に言う。

「何でそんなに面倒な事をしなくてはならんのだ」

「こつちにも理由はあるんや」

「本当にコインロッカーの中に金は入つてゐるんだらうな」

電話越しにも眉間に皺を寄せ、人差し指で押さえているのが分かる。それは彼女の癖だ。

「間違えなく入つとる。阪急梅田駅の中二階のコインロッカーや。」

番号は鍵に付いているからそれを見てくれ」

「本当にややこしい老人だな。まず本本堂の箱だな。だが、どんな箱なのだ？」

「装飾が綺麗な箱や、入ってすぐの所にあるわ。箱はその箱しか置いてないから簡単に分かるはずや」

「買われることはないのか？」

「めっちゃ高い値段やったから、大丈夫や」

「なるほど、私が手間をかける理由は分からぬが、まず箱を盗めばいいのだな」

「おい、おい盗むって」

そう言う前に、電話は切れていた。不通を伝える電子音が空しく響く。確かに盗むと言っていた。いたちならやりかねない。まあ、そこは彼女の問題だからどうでもよいが。

笹本は電話を止めたのに気づいだようで、こちらに近づいてくる。

「どうやら、俺の天使に勝る美女はいないようだな」

手をひらひらさせながら、いない、いない、と続ける。

「なに、訳分からんこと言ってるねん。ほら行くで」

「行くって？」

「兎に角、ここじゃない所に行くんや」

「また、適当な」

そう言いながらも笹本は後から着いてくる。意外に素直な奴なのかもしれない。こうして二人そろってかっぱ横丁を出る。さてどこに行くものか。

## 第19幕 二階堂玄介

「いたちがコインロッカーから金を取り出すまで、なんとかして笹本を違うところまで連れていかなくてはならないのだが、特に目的もない為、先ほどからスポーツジム前に設置されている足湯に浸かっている。どのみち金がなくなって笹本は怒るだろうが、泥棒の仕業にでもして何とかごまかそう。」

「スポーツジムに足湯とは何か意味があるのだろうか？」

「両足のジーンズを捲って足を浸けている。どうも足湯は人気がないようで他には誰もいない。」

「汗をかいた後に足湯ってことやる」

「体が足元から暖かくなり額から薄っすらと汗が噴き出てくる。」

「中にシャワールームもあるのに何考えているんだか、実際に人気もないし。でも、この足湯によって我々は暇を潰しているのもまた真実ってことか」

「笹本はぶつぶついなからこちらを向く。」

「なあ玄爺。そろそろ時間を潰すのを止めてコインロッカーに行くことうではないか、それでもう一度パチンコでもして資金を増すのが得策だ」

「まあ、待て。まだ早いんや」

「笹本が苛立つのも当たり前だ。」

「駅を出てから歩き続け、もう歩けないと思った時この足湯を偶然見つけた。小さな四角の枠の中から立ち上る湯気を見て、これぞ神の思し召しと思わずにはいられなかった。」

「その時、携帯電話の音が鳴る。初めは気づかなかったが、笹本がおい、携帯鳴っているぞ、そう指摘されて慌てて取り出す。液晶画面を見ると、そこにはいたちの名前が表示されている。」

「そつと足湯から出て、笹本がまだ浸かっている事を確認し、すばやく携帯電話に出る。」

「もしもし」

「いたちだ、問題が起きた」

「問題？ なんや？」

「……コインロッカーには金が入ってない」

少しの沈黙の後、予期せぬ言葉が耳に入る。それを聞いて絶句する。コインロッカーに確かに金が入れた。鍵の隠し場所が誰かに見つかって、開けられてしまったのか？ 何か言おうとするが頭が真っ白になり、言葉が出てこない。

すると、ふふふ、と声を殺した音が聞こえる。

「なんてな、嘘だ。ちゃんと金は入っていた。十二万きっちり返済完了だ」

体から一気に力が抜け同時に怒りが頭に上る。

「このあほ、ほんまに心臓が停まると思っただやないか、何考えてんねん」

「まあ、そう怒るな。お利口な蛙ちゃんにはプレゼントを用意したからな」

「プレゼント？」

「そうだ、プレゼントだ。コインロッカーの中に入れておいたから確認したまえ」

「コインロッカーにまた入れたのか。鍵はどこや？」

「それは勿論、本本堂にある箱に決まっているだろう」

そこで、通話は一方的に切られてしまった。いたちの気まぐれには参ってしまった。そのプレゼントとやらを取りに行かないのも手だろうが、プレゼントと言っているし、取りに行った方が得策だろう。それにしてもまたあの本屋に戻らなくてはいけないのか。笹本に視線を向ける。彼はまだ足湯に浸かっており、湯に浸かっている部分が真っ赤になっている。

「おい、また本屋に戻るで」

笹本はそれを聞いて、またかよ、と声を上げる。

「また本が欲しくなったんや、それが終わったらコインロッカーを」



開けるで」

「それは本当だな？ では早く行こう」  
今度は笹本が先行して歩き始める。

## 第20幕 笹本太郎

小さな封筒がぼつんと置かれているコインロッカーの前で、笹本太郎は放心している。このコインロッカーを閉じた時にはちゃんと十二万円が入っていた。中に金を入れて鍵を閉めるところまで思い返す。そして再度コインロッカーの中を見るがやはり小さな封筒が入っているだけだ。どうみても、封筒の厚みが足りない。

もしかしたら違うロッカーを開けてしまったのかと番号を確かめるがやはり1211だ。玄爺がしきりに、イニイ、なんて変な語呂で決めていたので間違いはないはずだ。

そもそも、違うコインロッカーが持っている鍵で開くはずもなく、この心配はあり得ないことだ。もしかして、どこかにあるのかも、と思いコインロッカー上部や扉の裏などくまなく探すが発見はできない。これは間違えなく何者かがこのコインロッカーを開け、中の金を取り出し、そしてここに封筒を入れたのだ。

ここで疑問なのは、その犯人はどうやってこのコインロッカーを開けたかと言う事である。鍵はずつと玄爺が持っていたはずだ。そんな事を一気に考える。

「おい、玄爺。金がなくなっているぞ」

自然と声が震える。玄爺は横にやってきてコインロッカーを覗き、同時にうわあつ、なんやこれ、と声を上げる。

「泥棒や、泥棒や、金が盗まれてしまったわい」

そう言つて、騒ぎ出す。道行く人々は何事だとこちらに注目するが、立ち止まることはせず通り過ぎて行く。

「玄爺よ、鍵はずつと持っていたのだな」

「そつや、肌身離さずつと持ってたわ」

「それなら、何故……」

「きつと、錠前師みたいに鍵を開けたんやろ」

「こんなにコインロッカーがいっぱいあるのに、我々のだけ偶然開

けられたと言うのか？」

「多分、わしらが金を入れるところを見られておつたんや」

確かにコインロッカーに金を入れる時に誰かに見られぬように注意をしてはいなかった。そこを目撃されてコインロッカーを開けられたのか。あまりにも不運でありそうもない事だが、これ以外考える事が出来ないのもまた事実だ。

「とりあえず警察に行かなくては」

「警察はあかん」

玄爺は強く反対する。

「何故だ。盗難されたのだから、警察に届けるのが常識だろう」

「警察はあかんねん、警察に行つたら、いろいろ身元とか聞かれるやろ。わしそつうのあかんねん。若い時ないろいろしとつてな、警察だけはほんま勘弁やねん」

「おいおい、玄爺、お前は一体何者なのだ？ 一体何をした？」

若い時に一体何をしつたと言うのだ。まともな人間ではないとは思つていたが、本当に外道な人間なのかもしれない。玄爺の足先から禿げた頭皮までじっくり見る。以前にまして胡散臭さがまして見えるのは、今の話を聞いたからであろうか。

「なんでもええやないか、兎に角警察はあかん、却下や」

玄爺があまりにも必死の抵抗をするので、これは警察に行くと本当にいけない事になるような気がする。

しかし、先ほどまで十二万円は我々のものになると疑つてやまなかつたので、何もせずただ泣き寝入りすると言つのも癪な話だ。だが、これと言って解決策は思いつかない。それに警察に届けたとしても盗まれた金が返ってくるとは到底思えない。

そこでやっと、コインロッカーにある封筒に気が向く。はたしてこの封筒は何なのだろうか。間違はなく犯人が置いていったものがあるが、どういう意図があるのだろうか。泥棒が置いていくものにくなものがあるはずない。それにしても薄い封筒だ。開けたら爆発なんてことはないだろう。ならば剃刀などが入っているかもしれない

いな。

そんな事を思っていると、玄爺は何の警戒もせず拾い上げる。

「おい、危ないものが入っているかもしれないぞ」

「大丈夫や」

玄爺は本当に臆することがないらしく、何もためらわず封筒を持つ。

「そんな事何故分かる」

忠告を無視して封筒の端をぴりぴり破いていく。私は注意深く切れ端を見つめ、玄爺の指が剃刀で切れたりしないかと心配する。

「ほっ」

玄爺はそんな、感嘆に似たような小さな息を漏らし、中身を摘み出す。玄爺の皺だらけの手には、薄い紙が二枚ひらりひらりと摘まれている。

## 第21幕 笹本太郎

十二万円もの大金を失ったと言うのに、私は時間が経つにつれて、自分でも驚くほど平静さを取り戻していた。

それはあの金がギャンブルで儲けた金であるのと、玄爺との出会いやパチンコで大勝ちしたくんだりなどが自分の頭で何度反芻しても理解不能の事態である為に、金がなくなることの驚きが半減されたとしたとしても不思議ではないことである。

そして今、私は玄爺の後に続き東通りを歩いている。コインロッカーの一件後、玄爺は私に対して気を使ったのか、はたまた、気紛れか、私を酒に誘ったのだった。私は確かに酒を大いに飲みたい気分でもあったのでその誘いを了承した。

どうやら玄爺には、行きつけの飲み屋があるようで、迷わず右へ左へ進み、細い裏路地に入っていく。脇に置かれたポリバケツやところどころにある水溜まりを我々は避けて進み、私は来た方角が分からなくなった時に、ようやく玄爺は止まった。

「ここや」

どうやら飲み屋にいったようだ。私は弾んだ息を整えながら周囲を確認する。私が立ち止まっている裏路地は薄暗く、壁から突如出た管からは水滴が垂れ下に小さな水溜りを作っている。その横の排気口からは煙が空へ立ち昇りその煙はどこか果物の様な香りがするよりに感じられる。

なるほど、どうやら店の裏の様だ。しかし私の目のつくところに裏口らしきものはなく、ただ木目の壁があるだけだ。

「おい、玄爺。ここが飲み屋なのか？」

「おお、そつや」

「しかし、裏に来ても仕様がないだらう。裏口もないようだし、さつさと表に回って飲もうではないか」

「まあまあ、待て。せつかちはこれやから困るんや」

やれやれ、と言った風な表情を浮かべる玄爺に私は少なからず怒りを覚えたが、ここは怒りを抑え彼の行動を見守る。

玄爺は木目の壁に近づき、それをじっと見つめる。そして、壁に両手を当て擦り始めた。少し周囲を誘った後、ここやな、と呟き、細い骨だけの様な腕で壁をぐいと押す。すると壁だと思っていた場所がまるで忍者の回転扉の様に中心を軸に回転し、店内へ通ずる裏口へと変わる。

「驚きやろ」

玄爺はまるで自分が凄い事をしたかのように私に向って問いかける。私が、まあ大したことないな、このような仕掛けだと初めから思っていた、などと言うと明らかに不愉快な顔をして、何言ってるんねん、と怒りだした。

玄爺と私はほんの少しの間、口喧嘩をしていたが、お互いに無意味なことを自覚していた為すぐに切り上げ、玄爺の案内で店内に入っていく。

その回転扉を入るとそこは厨房であった。白い割烹着を着た料理人が忙しそうに動き回り、パスタやらチャーハンやら寿司やら万国料理博覧会の様な各国の料理をすごいスピードで調理している。そして何よりも気になるのが、料理人すべてが二メートルある程度の長身で、しかも外国人なのである。人種も様々で黒人の男性が寿司を握り、アジア系の女性がパスタを茹でている。そんな大きな人間が持つ調理器具は異様に小さく見え、盛りつけられた量も少量に見えてしまう。

豪快に振るまう鍋から飛び上がる野菜や米に見とれていると突如横で誰かに呼ばれた様な気がした。その声がしたと思われた方向へ視線を動かすが、そこには誰もいない。

「お、マスター久しぶりやな」

気のせいかと思ったその時、横の玄爺が目線を下げて言葉を発した。私もその目線につられて首を下へと傾けると、そこには小さな男性がいる。小さいと言っても、彼の場合小さすぎる。身長と言っ

たら私のへそよりも少し大きいぐらいなのである。そして、一般男性をそのまま縮小した様な体格はとても違和感がある。

「蛙さんじゃありませんか。お久しぶりです」

彼の声は何故か甲高いものであると勝手に想像していたのだが、その予想は外れ、しっかりとして大きな声だ。

「蛙？」

私が思わずそう発したのを聞いて、マスターと呼ばれる男性は私の方をしっかりと見据え、この方は？ と愛嬌のある笑顔を浮かべ玄爺に尋ねる。

「こいつはわしの連れや、ちゅうても今日会ったばかりなんやけどな。舎弟みたいなもんや」

「誰が、お前の舎弟だ。この骸骨爺。ところで蛙と言うのは？」

「その事はどうでもええねん」

玄爺は不快そうに手をぶらぶらと振って、顔をしかめる。

「蛙と言うのはですね。玄介さんのあだ名なんですよ」

マスターは玄爺の代わりに答える。なんだか、そう言われると玄爺の顔はすこぶる蛙に似ているように見える。いや、似ているのではない。そっくりである。もはや、彼は蛙だ。蛙にしか見えない。突如可笑しくなって笑いが溢れてくる。何とか呼吸を落ち着けて、顔を上げるが、そこには玄爺の顔があり、また笑いが止まらなくなる。

「玄爺、その顔をなんとかしてくれ」

笑い過ぎて、あまりに苦しく、はあはあ言いながら言葉を絞り出す。しまいには涙も溢れてくる。

「このド阿呆、人の顔を見てげらげら笑う奴がおるか」

「しかしだな、玄爺。お前の顔は毛のない蛙だ」

「お前もあいつと同じようなこと言いよる。そもそも蛙には毛などないんや」

玄爺は顔を真っ赤にして怒っている。なかなかの得ているあだ名なのだが、当の本人はお気に召してはいないようだ。マスターの

視線を移すと、呆れた顔をしながらも、まあいいじゃないですか、と小さな手で肩を叩きながら宥めている。

「ところで、この匂いはリユーヤかい？」

玄爺がさっきの怒りはどこに行っただのやら、一変してにこやかに尋ねる。

「はい、上物を今朝入荷したのです」

「上物とな、それは試さなあかな」

「玄爺、リユーヤとは？」

どんどん進んで行く会話に思わず割り込む。

「この店はな水煙草を吸う事が出来るねん。ほんで、水煙草に使う香料、つまりは味付けみたいなもんやな、その一つがリユーヤやねん。ほら、そこにある容器が水煙草のもんや」

そう言つて奥の棚を指差す。なるほど前から水煙草の存在は耳にしていたが実物を見るのは初めてだ。長い筒の下に水が溜まり、そこから吸引用の管がある。はたしてどのような味なのだろうか。

「どれどれ、興味津々つて顔やな」

玄爺は私の顔を覗いて言う。そして、行くで、と言って、厨房から店内に入つて行く。

店内は異様に細長く、そして、なぜか並んで設置されている掘り炬燵がその異様さを増長させている。細い店内の細い廊下には、着物を着た店員がそくさと往來している。異様と先ほどから述べているが、どこか懐かしいようで温かい感じもする。そうまるで実家に帰つてほつとする、そんな感じに似ている。

その時である。おい、と向こうから女性の声が聞こえた。とてもハスキーな声で、聞き惚れてしまいそうな声である。実際、店内の客、店員も少しの間彼女の声に捕らわれ、会話や作業を止めていたかのようにも思えた。

「蛙ではないか」



## 第22幕 笹本太郎

「蛙ではないか」

そう言った女性は店内中央の掘り炬燵に座っており、右手を大きく振りながらこちらを見ている。

女性にしてはとて大きな体をしており、それは座った状態でもよく分かる。鼻筋の通った端正な顔立ちをしているが、何よりも印象的なのが目である。刃物の様にすらりと切れた目を携え、中の眼球は鋭く光っている。じつくりと観察していた私に彼女が一瞥される。その瞬間体の奥から委縮したのが分かった。私が長年に渡り遊び呆けて様々な種類の人間を知ってきた私の感が、こいつは只者ではないと警戒している。

「おい、こら。蛙よ。どうしたのだ。早く、こっちに来るのだ。金ならあるぞ、今日は金があるのだ」

彼女はそう言って、玄爺を見据えながらにやりと笑う。今のやりとりは何を意味しているのだろうか。一方の玄爺と言えば、彼女の言葉を知らぬ顔で受け流して、違う席に座ろうとしている。

「おい、玄爺。あつちの席に行かなくて良いのか？」

そう言った私の言葉を玄爺は厄介者を見るような視線で返し、掴もうとした私の手を払い除けた。そこで初めて分かった事だがどうやら玄爺は焦っているようなのである。髪の毛のない頭皮に薄っすら汗までかいている。しかし、彼女が知人であるのは間違いがない、そして彼女の方はどうやら好意的に玄爺を迎えているように見える。それではあまりに相手に対して失礼だ。

「何だ、その態度は。無礼でないか」

そう言ったのは私ではなく彼女の方であった。彼女は立ち上がりこちらに向かってくる。立ち上がった彼女は私の想像以上に身長が高かった。彼女は飛びかかるように我々に接近したかと思うと、玄爺の肩を掴み激しく揺らした。玄爺は首がかくかくんと左右に揺

れ、そしてだらんと前に垂れる。

「おいおい、玄爺。もしかして、死んだのではないか」

そんな事あるはずないと思いなながらも、僅かに焦り、叫んでしま  
う。

「この爺はそんなに簡単に死にはしない」

彼女はそう言って、再度玄爺の首を振り始める。

「こら、いい加減止めんかい」

本当に死んだかと私が疑った時に玄爺は怒鳴った。顔を真っ赤に  
して蛙が茹で蛸になっている。そして、死ぬところやったやないか  
とまた怒鳴り散らした。

「お前が無視するから悪いのだ。私が一体何をした」

今度は襟首をもつと捻じり上げている。そろそろ本当に死んでし  
まうのではなからうか。

「止めい、死ぬやないかい。今のはほんまに危なかったで。首がき  
ゅつとなつたわい」

「ええい、うるさい。四の五の言わずに私の席に来い」

そう言って彼女はその腕を玄爺の後ろに回し、彼を軽々と持ち上  
げて、元の席に戻って行く。私は置いて気ぼりの感じは否めないが  
後に付いて行く。先ほどまで気がつかなかったが、彼女の席には水  
煙草と空のグラスが二つある。連れの人がいたのだろうか。

彼女は玄爺を無理やり座らせ、そこを動かすなよ、と言って、自分  
は向かいに移動する。私はどうしたものかと思っただが、そつと何食  
わぬ顔で玄爺の横に座り、あたかも自然に振る舞い輪に入ろうとし  
た。実際、まるで何事もなかったかのように会話が始まる。何てこ  
とあるはずがない。彼女はやっと私の存在に気がついたようで、き  
りつと睨む。

「おい、蛙。こいつは誰だ？」

「こいつは、わしの舎弟や」

蛇に睨まれた蛙とはまさにこの事だ。玄爺は強がっているようだが、  
声は小さく張りが無い、視点も空飛ぶ蠅を追うようにきよろきよろ

している。玄爺は彼女にさらに睨まれ、小さな体をさらに小さくする。

「蛙ごときに舎弟もなかるう。さしずめお前の厄介事に巻き込まれたのだな。名前は何と言う?」

玄爺を平手で軽くぱんと気持ち良い音を立てて叩く。そして私の方を見る。

「笹本太郎だ」

「ささも、なんだって?」

「笹本太郎」

「笹本太郎か、字はこうで合っているか?」

そう言っただけで彼女は割り箸にグラスの水滴を付け、テーブルの上に漢字を書く。

「そつだ、よく分かるものだな」

私は基本的に敬語を使わないと言っただけ、使えない人間なのだが、どこか彼女には普通に話すには恐縮してしまう凄味が存在する。しかしここは意地になりそのまま話す。彼女も嫌そうな顔をしないので問題はないのだろう。

「笹本太郎なんて、この他に書きようがなかるう」

「確かにそれはそつだ」

「笹本太郎、ささもとたるう、ササモトタロウ……」

「どうかしたのか?」

「いや、大した事ではないのだ。しかし……」

「また始まったわい」

「おい玄爺、どう言う意味だ」

「笹本太郎……いや、駄目だな」

「一体何が駄目だと言うのだ。これでも親が付けてくれた立派な名前だぞ」

たぶん、と心の中で囁く。

「お前の名前は……平凡すぎる……」

それを聞いた瞬間、頭に電流が流れたように痺れ、ぼんやりする。

そうなのだ、私の名前は平凡すぎるのだ。あまりに平凡な為、他人が私の名前を忘れることもしばしある。そして何よりも、親は私の名前をちゃんと考えたのであろうか、そんな疑問を今まで持ち続けてきた。太郎ではなく、漱石、龍之介、乱歩など私にふさわしい名前など沢山あるだろう。笹本鷗外など格好いいではないか。しかしながら、さすがに今会ったばかりの赤の他人に指摘されるのは腹が立つ。私の名前がいくら平凡であろうといい迷惑だ。

「うむうむ、何か良い呼び名がないものだろうか……」

「良い呼び名？」

「そうだ、良い呼び名であって、呼び易い名で、覚え易い名だ。ちなみにこいつに蛙と命名したのは、何を隠そうこの私だ」

隠すも何も先程から薄々分かっていた。一方蛙はと言うと甚だ不愉快な顔をして、いつの間に注文したのやらビールをぐいっと飲んでいる。

「タツノオトシゴなどどうだ」

「それは呼び難いし、覚え難いだろう」

「では、オトシゴにしよう」

「落とした子供みたいで訳が分からぬ」

「ええい、文句が多い奴だな。もうお前など猿でよい」

「それは、なぜ？」

「お前に生物学的観点から一番近いから。まあそんなところだ」

「どんなところだ。それなら人類全員そうであるはずだ」

「じゃあ、ナマコにするか？」

「……いや、猿でいい」

こうして私は猿と命名された。一時、猿とナマコの二者択一を迫られたが、哺乳類で人間の祖先である猿を私は迷わずかつ迅速に選択したのだ。

玄爺は早くも酔いが回ったのか、私を指差し、よう見たら猿に似るとわ、と蛙顔で大笑いしている。

「私はいたちだ」

彼女、改めいたちはそう言い、右手を差し出す。私をそれを握り返した。

## 第23幕 笹本太郎

猿と命名された私は、多大な不快感と腑に落ちない気持ちの心の中で渦巻くのを感じながらも口には出さず、代わりに、焼酎お湯割り、と注文する。

玄爺のジョッキはすでに三杯目に入っており、それに負けじといたちも一息にビールを飲み干す。ところで、といたちがげっぷをしながら声を出す。

「ところで、猿。お前はなぜこの蛙と一緒にいるのだ。この蛙といても問題が起こるだけであろう」

そう言つて、こちらを笑いながら見据える。玄爺は、うるさいわい、と怒鳴つたが、いたちに睨まれると黙ってしまった。玄爺がここまでいたちに弱いのは何か訳があるのだろうか。しかし、いたちが言う事は当たっている。現に私は玄爺に会つてからと言うもの悪いこと続きである。

私はたつた今、運ばれてきた焼酎を一口飲み、玄爺とここまで経緯を説明した。

私が女性を追つて電車に乗り込んだ理由は伏せ、大学のお世話になつている教授を隣の車両で発見し、車両を移動しようとしたが、突如玄爺が現れ、じゃんけんをしろと訳が分からない事を言つている玄爺を可愛そうな老人だと慈悲の心で相手をしていたところ、なかなか勝つことができず。教授を見失つてしまった。そして、なぜか逆上した玄爺は私を引き摺り回し、隣町まで私を連れて徘徊し、途中、犬と会話などをしたりして、なんだか分からないうちにここに来てしまった。

とりあえず、でたらめだが全面的に玄爺が悪いと言つ説明をする。この様な説明が出来るのも、玄爺はトイレに行つてなかなか帰つて来ないため、この際、自分に都合の良い説明だけしてやれと考えていたら、ほとんどが嘘の説明になつてしまった。

「いたちはその話を聞くと豪快に笑い、またビールを飲み干す。彼女の笑う声もやはり魅力的な力を持っていた。」

「そうしていると、玄爺がふらふらと席に戻って来た。彼はすでに顔を真っ赤にして完全に酔っているのが見て取れる。席に着くと同時にもう一杯注文を追加し、当然のようにいたちもそれに続く。」

「玄爺よ、飲み過ぎだぞ。顔が茹で蛸の様だ」

「蛸ではない、茹で蛙だ」

「いたちが横から入ってくる。」

「蛸でも、蛙でもないわあい、わしゃもつと飲むぞお。酒に飲まえてやるわい」

「酒に飲まれては駄目であろう。それにさっきからかなり飲んでいますが、金は持っているのか」

「うるしゃい」

「玄爺は呂律の回らないままその場でジタバタする。」

「まあ、金なら私が払ってやらないでもないがな。なんせ今日は金があるのだからな」

「本当か？ それならありがたい。今日は不運が続いて金がほとんどないのだ」

「礼なら玄爺に言うが良い。元は私の金だから、玄爺に礼とは変なのだが、まあ良い」

「私はいたちが言う事が理解できずにいた。なぜ、いたちが私たちに酒を奢ると言う行為が、玄爺と関係するのであるのか。」

「ちよつと待ってくれ。なぜ、そこで玄爺が出てくるのだ？」

「まあ、細かい事はええやないか」

「玄爺が間髪入れずに話を止めようとする。顔を見ると先ほどの赤い顔も若干血の気が引いたようになっており、明らかに焦っている。それにしてもやはり蛙顔だ。」

「猿、今日は一日蛙とおつたのだろう？」

「そつだ、昼前からずつと一緒だ」

「なら分かるだろう。この金の事が」

そう言っていたたちは無造作に封筒を掘り炬燵の上に放り投げる。そうは言われても、封筒を見ても何も理解できない。封筒を手に取り中身を見てみる。中には一万円札が数枚入っている。おそらくいたちはこの中の金で奢ると言っているであろう。

しかしこの封筒……どこか頭に引っかかるところがある。私は以前どこかでこれを見た事がある気がする。封筒、一万円札、玄爺、一万円札、封筒、封筒、一万円札、一万円札、封筒、蛙、玄爺、封筒……コインロッカー……

なんと、今手にしている封筒とその中の金は我々がコインロッカーに入れたものではないか！ 次の瞬間には玄爺の襟首を持ち、強引に左右に振り回していたのはもちろん私であった。

「玄爺。これがどういう事か説明してもらおうか。答えによったらただじゃおかないからな」

そう言つて、さらに強く振る。

「おいおい、猿。そんなに振つたら、死んじまうぞ」

「この爺はこれ程の事では死なん」

「確かにそうだ」

そのまま振り続けていると、玄爺が何かを言ったようなので振るのを止め視点が定まらぬ目を見る。

「なにすんねん。死ぬやないかい」

「なにすんねん、ではない。これはどういう事なのだ、なぜこの金をいたちが持っているのだ。この金は今日パチンコで稼いだ金だろ  
う」

「ほうほう、パチンコで稼いだ金なのか。しかも猿の金を渡すなど、とことんお前は腐れ爺だな。お前など蛙の恥さらしだ。世界中の蛙に謝罪しろ」

「なに訳の分らんことぬかしとんねん。いたちは口をはさむな。ほんで、猿は金の事は気にするな、過ぎた事や」

そう言つて、うるさい蠅を追い払うように手をひらひらさせる。

「やれ」



いたちがそう言つと同時に、また襟首を掴み左右に振る。

「ふざけるのも大概にしる。人の金を勝手に渡すとはなにごとだ。ちやんと説明しろ」

「やめえと言つてるやろうが。老人を労わることを知らんのか最近の若者は」

「ではちやんと説明しろ」

「分かつたわい」

諦めたようにそう言い。続ける。

「わしはいたちに借金しとつてん。ほんで今日が返済の日やったんやけど、金がなくて困つててん。そこでやがな。お前と俺がパチンコで儲けたとあつたら、その金で返済する。それが常識ちゆうもんやろ」

「そんな常識あるはずがないだろ、この馬鹿蛙」

そう言つて、玄爺の頭を平手で打つ。玄爺は、うわ、めっちゃ痛つ、と大げさに倒れこみ、ひどいわあ、と嘔泣きをする。

「おい、蛙。それで、この猿にばれない様、この私ところに金を持って来ずにコインロッカーなんて面倒なところまで取りに来させたのだな。おかげでとんだ苦労だつたぞ。それでどうせお前の事だ。今日この場で会わなかつたのなら、本当の事を言わないでおくつもりであつたのだろう。とんだペテン師蛙だな」

いたちは地面に倒れている玄爺をつま先で小突きながら言う。

これで玄爺の奇怪な行動も理解できた。なぜコインロッカーに執着したのか、なぜ金がなくなったのにも関わらずその後は落ち着いていたのか、そしていたちに頭が上がらないのは全てこの金の問題だつたのだ。

「おい、玄爺。どう責任取るつもりなのだ」

その声を聞いて、玄爺は突然立ち上がり、低い姿勢で走り出した。その体捌きは華麗で、仰向けになつた体を素早く反転させクラウチングスタートの様な体勢を作り、そのまま地面を蹴り飛び出した。あまりの早さに私たちは驚き反応することができない。しかし、玄

爺は飛び出す先に柱があることまで把握していなかった。

勢いよく飛び出した玄爺は思いつきり柱に頭をぶつけ、ぎゃはひいん、と今までに聞いたことのないような悲鳴を上げて倒れる。

「おい玄爺大丈夫か」

急いで駆け寄るが、玄爺の眼は白眼を剥いており、なんとも言えない恐ろしい形相にたじろぐ。

「死んでいる」

横にいるたちが叫ぶ。その声を聞いた店内の客たちは一斉にこちらに視線を移し、状況を誤解した何人かは悲鳴を上げた。店内の騒然とした様子を察したマスターが小さな体を精一杯動かしこちらへ走ってくる。

「どうかしたのですか？」

「この、えっと、玄爺が、あ、どうしたものだ」

私は現状を説明しようとしたが、頭が混乱して言葉が出てこない。

「蛙は今、天に召されたのだ」

「なんですって!」

「彼の人生は不幸続き、顔も性格も富も名誉も恵まれず、辛い一生であったろうが、天では幸福な時間が彼を待っているだろう」

マスターは慌てて玄爺の腕をとり、脈を診る。そして、こちらに振り向く。

「生きてますよ」

マスターは、ふう、と息を吐いて座り込む。私も全身から力が抜け、座りこんでしまう。

「なんだ、生きていたのか」

「私たちは少しばかり残念そうな表情を浮かべ頭をかく。」

「いたちさん、いたずらは止めてくださいよ」

そう言って、玄爺を端まで引きずって行き、毛布を掛け、なんでもありませんご迷惑おかけしました、と客の一人一人に謝罪してまわる。

突然、ところで、と話を切り出したのは、いたちだった。

「ところで、先ほど奢ってやる、と言ったが何もタダで奢ってやる訳ではない」

「どづいうことだ」

「賭けをしようではないか」

そう言う、私たちの目には怪しい光が宿っている。

## 第24幕 笹本太郎

笹本太郎は元来生まれつきの墮落者と言う訳ではなかった。だからと言ってこの様になつてしまったのは、家庭環境が影響したのと言うのも違つていた。彼の父親は小学校の先生、母親は専業主婦という一般家庭で育つ。

では、なぜこのようになってしまったのか、彼は幼き頃から活発で、そして今の姿から想像できぬほど可愛らしい容姿をしていた。そもそも幼き頃は皆可愛く見えるものであるから、群を抜いて可愛らしいという訳ではなかつたのである。群が不細工ではなかつた。

彼が他の子供たちと違つた点は、群れることをしなかつたことだ。友人を作り、一緒に遊ぶのが嫌だつたという訳ではない。しかし彼は常に特別でありたいと願つていた。そして自分は人とは違つ、特別だという意識が少なからず幼き心に宿つていたのだ。

しかし、そのように群れることはなくとも彼には友人が多かつた。彼は人見知りとは無縁の馴れ馴れしさを生まれ持つており、それが功を制し彼を親しまれた。

小学生になつてからは、特別でありたいと思つ気持ちが次第に強くなつてきた。そして、それは言動や行動にも表れ始める。とは言つても彼は特別に運動神経がよいや天才的な頭脳を持つていたと言う訳でもなかつたので、普通にしているはその欲求を満たすことはできない。そこで彼は悪戯やふざけるなどの行為をする事にした。子供が目立ちたい一心でこの様な行為に至るなどよくあることで、ここからして彼は平凡であつた。

学校の給食の一部を鯉など飼育している池に捨てたり、先生の椅子に接着剤を塗つたりなどして怒られる事が多々あつたが、彼の頭の中では常に特別な事をした満足感で満ち溢れていた。

しかし中学生になるところもいかない。小学生の時は皆が大笑いしてくれていた悪戯も誰もくすりと笑わないのだ。それもそのは

ず中学生にもなつて悪戯をするような奴はただの馬鹿である。この時に自分は平凡だと気が付き己の素行を正せばよかつたのだが、自分は特別であるという殻に閉じこもるように人と接しなくなり、学校にもあまり行かなくなつた。

つまりは、自分はやればできる人間であり、今はやってないだけだ、と自分自身に言い訳をする事にしたのだ。

学校に行かない状態であつたが、彼の状態はグレているのとは違つた。ヤンキーや不良、これらにどのような区別があるのかは明確に分からないが、彼はそれらにはならなかつた。その理由は単純明快で面倒だつたのだ。不良たちはグループを作り、先輩や後輩などの関係が強い、これなら学校生活と変わらぬではないか、そう考えたのだ。

つまり群れる行為はこの年になつても彼のタブーであり、忌み嫌うもであつた。

家でごろごろと過す、近所をぶらぶらと散歩、そんな事をして中学時代を過ごした。両親はそんな彼の性格に不安を抱き、なんとか学校に行かせようとしたが、叱つても泣いて頼んでも、反発するわけではなく、ごめんごめん明日はちゃんと行くさ、などと笑ひながらひよろりとかわしてしまふ彼をどうする事も出来なかつた。現に悪さをしている訳でもないし、家庭内での素行も悪い訳ではないので、両親はこれもまた仕方がないのかもしれない、と諦め始めた。

そんな有様であるから、成績は凄惨なる結果で、高校進学するなから地域でも悪評高い学校に入学する事は決定的であると思われ、実際に教師である父親もそうなるであろうと予想していた。それでも両親は進学することを希望していた。この不景気の中、中卒とは今後の大きなハンデになるであろうと考えていたのだ。子供の将来を考えると両親の希望は当然である。だが当の本人はと言うと、両親の心配など知りもせず、かなり前の段階で高校へ進学することは決めていた。その理由は彼の頭の中に働くなどという概念はこの少年は持ち合わせていなかったからだ。今の生温い生活が永遠に続

くことを望み、それ以外の選択肢を一切排除した。

そして、驚くべきことに周りの人の予想を裏切り、彼は地元でそこそこの公立高校に進学した。彼がこの高校に合格したのは、単に運が良かったただけだったが、この事は彼に自分はやればできる人間だ、という勘違いを完全に植え付けた。こうして彼の高校時代が、大きな勘違いと共に始まった。

## 第25幕 笹本太郎

高校生になつた笹本太郎は相変わらず自分は特別であるという慢心を抱いており、むしろ高校入学に関しての幸運によつて以前よりもその傾向は増していた。

彼は高校入つた時点で身長はかなり伸び、それが理由で多くの部活から誘いを受けた。バスケットボール、陸上、サッカー、テニス……これらの部活動の勧誘に彼は断ることなどせずに参加した。しかし参加はしたものの長く続く部活動は一つも存在しなかった。それは、ここにも彼の厄介な勘違いが邪魔をしていたからだ。

彼は部活動に参加し、練習する。対して怠けることもせず、数週間、程々に練習をした。しかし、なかなか己が上達して先輩たちの様に競技できない。それに対して彼は不満を持った。

だが、その様な事は当たり前である。たった数週間で自分より一年も二年も練習し続けている人間に追いつけるはずがない。実際のところ彼はそれなりに上達していたのだが、彼は自分が特別な人間と思ひこんでいる為、それなりの上達など上達していないに等しいと考えた。

そして、この競技は自分には向いてはいないと見なし辞める。この様にして彼は誘いを受けた部活動の全てを同様の理由で退部していった。

こうまでしても自分は平凡であると悟る事が出来ない程、特別である事は彼にとって重要で、一種のアイデンティティーとなつて脳の一部にへばり付いていた。

しかし、彼が部活動に所属しなかつたと言うと、そういう訳ではなかつた。彼はその大きな体に似合わず陶芸部に入部したのだ。

彼は元々陶芸に興味があり、陶芸への制作意欲に駆られ入部した。そんな事は全くなく、入学当初の彼は皆目興味を持っていなかつた。それではなぜ入部したのか？ その理由は陶芸部顧問が目当てで

あつた。

ある日、彼は彼女を偶然に学校の廊下で見かけた。その瞬間、高校生とは違うすらりとした大人の体、端正な顔にきりつとした一重の目、白いブラウスの下に隠れる豊満な胸を持つ彼女に彼は惚れた。彼はすぐさま彼女が、二年生担当の英語教師、菊池玲子であること、さらには昨年から陶芸部の顧問をしていることを調べ上げた。未婚であることも調べていた事は、言うまでもない。

それからの彼の行動はまさしく電光石火であつた。その日のうちに陶芸部に赴き、仮入部をした。作業場にはもちろん彼の思い人と菊池玲子もおり、彼はその姿を確認すると舞い上がった。

彼は彼女に好かれたい一心で陶芸に対して真面目に取り組んだ。そして玲子は彼のその姿勢を見て熱心に教えた。

実際、彼は陶芸に対してのセンスは悪くなかつた。それに彼が嫌う事は地味で結果が見えにくい、つまりは運動系の反復運動の様なもので、陶芸の様に見えて形を成していく作業は楽しかつた。また、陶芸とは他人と競うものでなく、余程ひどい作品でない以外は自分の陶芸は素晴らしいと思う事が出来た。こうして彼の特別でありたいという欲求も満たされたのだ。

彼は授業にはあまり行かなかつたものの、陶芸をする為に学校には毎日登校した。そして、玲子と話し、彼女の陶芸をする姿を見て心を高揚させていた。

彼女と仲良くなりた、さらにはなんとかして恋人にしたい。そして、彼女と抱き合い、触れ合いたい。そんな男性にとつての当たり前の欲望が彼にはあつたが、これといつて行動を起こすことはなかつた。なぜなら彼は今まで女性と交際したことがなかつたのだ。それ故、女性との接し方が分からない。事の流を経験した事がないからだ。ましてや、相手は年上の女性で学校の先生である。そのような事が可能なのか、それすら彼には判断が出来なかつた。

彼は恋愛経験の全くない頭脳で、何百通りもの告白のパターンを思案したが、全ては上手くいかないようである。彼が考えるにその



理由はあまりにも自分には魅力がなく、大人の女性を振り向かせるまでものは持ち合わせていないからである。そして実際にその通りであった。

彼はそのどうしようもない状態に悶々としたが、陶芸をする事、彼女を見て、恋い慕う事で毎日順調であった。

しかし、学校内での生活が彼にとって快適であるとは言い難かった。

## 第26幕 笹本太郎

学校に行くことを陰鬱とさせる理由があつた。それは、私の担任である石野三郎の存在である。今年で三十五歳となる石野は中々の長身の持ち主で、その体をさらに大きく見せるかのように全身に脂肪を纏っている。簡単にいえば肥満体なのだ。そして未だに独身だ。初夏に差し掛かるこの日、珍しく朝から登校していた。前日、部活動の時間に突然、玲子先生が明日は朝に陶芸をして、午後は部活動をなしにしようと提案したのだ。自分としては午前も午後も彼女に会いたかつたが、そのように望むなら従う他ない。あなたが望むなら何でもしようではないか。

こんな事を考えながら窓の外を見ていると、教室の扉が鈍い音を立てて開く。そこから、石野は巨体を揺らしながら中へ入って来る。黒板の前にある机の前まで大層ゆっくりと歩いて、教師用の椅子に腰を下ろす。椅子が限界まで下に沈み、サスペンションが悲鳴を上げる。まだそれほど熱くないのに、彼は全身が汗ばんでいて、眼鏡が蒸気で曇っている。右手に持っている使い古されて脂まみれになったサイドバックから、ハンカチを取り出し眼鏡を掛けたまま顔を拭き、そして薄くなっている頭皮の汗も拭おうとするが、ハンカチはすでにぐっしょりと湿っている。

彼は目の前にいる女子のスカートから捲れ出た太腿を見ていやらしい笑みをふつと浮かべ、教室を見回す。石野はほとんどの生徒から嫌われていた。彼からはセクハラの噂が絶えず、女性を見る目は一様にいやらしさを持っている。それでも彼が教師を続けられるのは、彼のセクハラが実に巧妙で、常に微妙な線でセクハラを行っているからである。

窓際の女子生徒がそつと窓を開ける。彼女はその窓から入り込んでくる新鮮な空気を必死で吸い込む。その姿を窓から離れた生徒は羨ましそうに見つめ、鼻にハンカチを当てる。

彼が生徒に嫌われているもう一つの理由で最大の理由、それは体臭と口臭であった。

彼の体臭は蠅でさえ恐れをなし、口臭は像をも殺すと生徒の間では噂されていた。それ程までに彼の体臭、口臭は強力なのだ。もはや生徒の中では「臭い」と「石野」は同類項である。そして何より問題なのが、体臭、口臭が強いという事を、石野本人が自覚していないことで、だからこの状態は一向に改善されず、一同はこのクラスになった事を毎朝後悔した。

私も、同様にこの吐き気のする様な匂いに耐え切れず、窓を開けて外の新鮮な空気を吸引する。

「なんだ笹本。いたのか」

突然名前が呼ばれたので、窓の方へと伸ばしていた顔を声の方へ向ける。

「お前など、もう学校など辞めていると思っていたぞ。もう会わなくてすむと思っていたのにな」

石野は汚いものでも見るようにこちらを見る。その言葉を無視し窓の方へ向き直る。

この男は何故だが、私にやたらと突っかかってくる。そしてその理由が全くもって不明なのである。何かこの男に害を及ぼしたりした事があるのなら分からぬでもないが、心当たりがない。確かに私の学校への出席率は悪いが、何か悪さをする訳でもなく、ただぼつと座っているだけである。これほど人畜無害な生徒がいるだろうか？ 否、いないだろう。質問すらしないのだから。そもそもこの様な態度は、生徒を指導する立場として如何なものだろうか。

気がつくともむかむかする様な臭いが強くなっている。石野がすぐ横に立っているのだ。彼の前腹は私の机の上に乗っている。なんて醜いのだ。

「昨日の夜に、誰かが学校に侵入して硝子を割って、廊下に納豆をばら撒いたらしいな」

そう言えば、今日登校する時に割れた硝子を補修する為に張られ

た段ボールを見た。

「そんな事もあつたらしいな。納豆をばら撒くとは中々面白い」  
その様な奴がこの学校にいるならば是非とも会ってみたい。

「お前がやつただろ」

「なんだと？」

「どうせくだらないお前の事だ、くだらない事をしようと思つても不思議ではないからな」

「何を言うか、やつたのは俺ではない」

「こんな事をするのはお前ぐらいだと思つがな」

本当に私がやつたとは思つてはいないようだが、何かと私に嫌がらせをしたいようである。悪意がまざまざと感じられる。一々癪に障る男だ。話しているだけでも腹が立つ。

私が黙っているのを見ると、ふん、と鼻を鳴らして、腹を揺らしながら元の場所へ戻つて行く。鼻息すら臭かった。

石野は数分間の陰鬱なホームルームを終えて教室から出て行く。悪臭のものがいなくなったことで皆一同、安堵の表情を浮かべている。

「お前も災難だな。どうしてこつちも石野に目を付けられるのか」

笑いながら同じクラスの和泉和也が横の席に座る。

「知るものか」

「まあ、あの臭い豚の事は気にするな。あいつは頭がおかしい」

和泉は長い髪を掻き上げて言う。端正な顔のこの男は、何故か私に馴れ馴れしい。私も好きでも嫌いでもない為、特に拒絶などはしていない。そもそも、あまり学校に来ていないためよく知らないのだ。

私を知りうる彼の情報と言うのは、彼はその見た目から大層、女子生徒から人気があるようだ。そして、彼は話によると女癖が悪いようで、常に二股、三股を掛けているらしく。私からすれば羨ましい限りである。しかし、その様な性格でも尚も人気があるのは、彼の立ち回りの巧さゆえであり、学校では交際を表立たせないからだ。

しかし、この話が出回っているのではないかと疑問に思うかもしれないが、この話は本人談であり、何故か私にはこの様などうでもよい秘密を明かすのだった。恐らくあまり学校で見かけない私なら安全だと思い、彼自身も武勇伝として誰かに語りたかったのだろう。

「お前、今日の放課後暇だろう？」

「暇なことあるものか、俺は常に忙しい」

全く忙しくなどなかった。だが、頭ごなしに暇だと決め付けられて、そうだと答えるのも嫌だ。

「俺は知っているぞ。今日の放課後は陶芸部の活動がないらしいじゃないか」

「何故それをお前が知っている？」

「井上に聞いたのさ」

井上とは陶芸部の女子生徒だ。恐らく和泉の彼女の一人であろう。それにしてもこの男、どこまで女と遊んでいるのだ。

「そうか」

なるべく、興味がなさそうに答える。

「ほら、暇じゃねえかよ。だから学校終わったら俺に付き合えよ」

「何故、俺がお前みたいなのむさ苦しい奴と一緒にいなくてはならないのだ。すなわち嫌だ」

「おいおい、俺はこれでも爽やかな好青年で通っているんだぞ」

「それは上面だけであろう」

「まあ、な」

意外にも簡単に認めるものなのだ、と呆れる。

「笹本。お前、石野が嫌いだろう」

「もちろんだ。しかし、それと何が関係ある？」

石野を嫌う事と、和泉に放課後同行する。全く関係ないように思われる。

「放課後、石野の後を尾行しようぜ」

逆光で黒く陰った和泉の顔が、こちらを見て笑っている。

## 第27幕 笹本太郎

退屈な授業を終えて、私は和泉と共に校門を出る。

「しかし、気が乗らないな。やはり、石野ごときに大切な時間を割くのは惜しい。それに面倒だ」

「おいおい、笹本。お前は石野が嫌いなのだろう」

「そうだが」

私の言葉を待たずに和泉は続ける。

「俺の情報によると、石野はこの前に梅田で女性と歩いているのを目撃されている。俺様の推測だと、あいつは援助交際をしている」

「その話はすでに聞いた。しかし、何故援助交際だと思うのだ？」

「あいつが女性にモテるはずがない。とすれば金で女子高生を買っている」

和泉は断定する。

石野が女性にモテないのは間違いないであろう。しかし、些か短絡的である。金で買うのなら女子高校生でなくてもよいではないか。梅田には無数にそのようなサービスを提供する店がある。私は行った事がないが……

「金で解決するなんて、不細工はなんて可哀そうなんだ」

和泉は嘆く。この男は確かに恰好が良い顔つきではあるが、それ程魅力を感じないのは私が男であって、さらには感覚が一般とはずれているからなのだろうか。

「しかし、つけて行ってどうするのだ？」

「それも言っただろう」

和泉は鬱陶しそうに続ける。

「もし、石野が女子高生と援助交際していたのであれば、犯罪だ。そうだろうか？」

「そうだな、と私は頷きながら答える。

「だったら、石野は犯罪者だ」

そうなるな、とまた頷きながら答える。和泉は出来の悪い生徒を見るような視線を私に投げかける。

「それを俺達が目撃してみる。石野は俺たちに頭が上がらなくなる。そうすれば笹本。お前への嫌がらせもなくなる」

それはそうだが、そんなに上手くいくのだろうか。それに和泉をここまでさせる理由が分からない。何故なら、この様に生悪い和泉であるが、学校での先生に対しての立ち回り方も実に上手い。石野に目をつけられている様子もないからである。しかし、所詮私には関係ない事だ、そう思って尋ねるのは止める。

校門を出てすぐの歩道で、信号が変わるのを待ったために立ち止まる。

「石野やつ。女子高生と援助交際するとは腹が立つ。俺ではなく、石野に俺の恋愛対象が、華麗な女が、抱かれていると我慢がならん」

先ほどの些細な疑問を勝手に解決してくれた。それにしてもくならない。こいつの頭には女の事しかないのだろうか？ しかし、和泉は軽く女性を抱くと口にする。それに対して、私には未だ女性との経験がない。どちらが正しい高校生の姿であるのだろうか？ 正しい高校生だと？ 正しい高校生。そのようなものは私が一番嫌うものではないか。正しい高校生などなりたくもない。私は特別だ。

信号が変わり、私たちは歩道を渡る。そして、校門を監視するこゝが出来て、少し離れた自動販売機の影に身を隠し、石野が出て来るのを待つ。

「しかし、今日、石野が援助交際をするとは限らないだろうか？」

「今日だ」

「何故だ？」

「勘だ、カン」

こいつの勘がどれほどのものかは知らないが、恐らく大したものではないだろう。早くも先行きが不安である。

信号が変わり、排ガスを吐きだしながら車が道路を往来する。石野はまだ姿を見せない。

一台の大型トラックが通り過ぎたその時、校門から玲子が出てきた。今日は部活動を中止にしたので、今からどこかに行くのだろうか？ 彼女を見ただけで私の胸は高鳴る。美しい姿に惹かれ、私は後について行こうとする。その時、私の腕をがっしりと掴んだのももちろん和泉だ。邪魔な男である。

「おいおい、どこ行くつもりだ。石野はまだ来てないぞ」

「もう、そんな事どうでもいい。もう行かせてくれ」

石野に対しての興味は既に皆無だ。

「何言ってやがる。早くこっちに隠れるよ」

そう言って、ぐいぐいと腕を引っ張って元の位置の戻そうとする。力は泉の方が強いので私は成す術なく、引きずられる。自動販売機の元に到着した時には、既に玲子の姿は確認できなかった。

この馬鹿野郎、和泉に向かって言う。それを聞いて、訳分かんねえ、と和泉は答える。その瞬間、和泉の視線は校門の方に向けられ、そして大きく眼を見開いた。

「石野が出てきたぞ」

校門から今まさに、巨漢の石野が汗を拭きながら出てくる所だった。



## 第28幕 笹本太郎

丸々とした石野の背を視界から外すことのないように、我々は追跡する。もつとも彼の巨体を見失う事などないだろうが。

石野は額から流れ落ちる汗を、鬱陶しそうにハンカチで拭いて歩いて行く。そして、五分程歩いて駅に到着した彼は、改札口に贅肉を挟まれながら通過して行った。我々は急いで電車の定期券を通しホームに向かう。

石野は電車に乗り込むところであつた。私は焦つて同じ車両に乗り込もうとしたところを、和泉に腕を掴まれる。振り返ると和泉は鼻を摘まんでいる。そうだ、石野の体臭はただならぬものであつたのだつた。私は危うく車内で呼吸困難で死ぬところであつた。

我々は隣の車両の一番端に座り、石野の様子を観察する。

石野は車内に座るや否や、眠りこけた。石野自体はその状態から変化することはなかったが、車内の様子はすぐに変わっていった。まず、石野の近くにいたものは、すぐさま彼の異常とも言える体臭に気づき、訝しい顔をしながら、手で鼻を覆つた。しかし、すぐ悪臭に耐え兼ね、我々がいる車両に移動してきた。まるでそれが合図であつたかのように、石野がいる車両の大半の人物が先ほどの者と同様に移動する。

それでも数人は辛抱強く耐えていたが、次の駅に到着すると、すぐに降り、素知らぬ顔で車両を移動した。こうして、石野は車両に一人取り残された。

「すごい光景だな。石野一人になってしまったぞ」  
和泉は笑っている。

「しかし、毎回この様な有様だと、通勤時間など大変であろう。本人は気がつかないのだろうか」

「あいつは普段、車通勤だ。しかし、今日は梅田に行く日だから、電車なんだろう」

だから和泉は今日、石野が梅田に行く日であると分かったのだらう。今の時点ではまだ梅田に行くとは決定しないが、恐らくは向かうのだらう。何が勘だ、この野郎。そう思ったが、いちいち怒るのも面倒なので止める。

石野は女子高生と会って、酒でも飲むのだらう。だから車ではないのだ。それに学校から梅田なら電車の方が、勝手が良い。

誰もいない車両にどっかりと座っている石野を観察して、気づいた時には梅田に到着していた。やはり、梅田だったのか。石野はアウンズが梅田と数回言ったのを聞いて目を覚まし、降りる。

我々もすぐに降り、彼を追う。すれ違う人が顔をしかめているのは石野のせいであらう。

石野は人込みを避けることなどせず、そのまま突き進んでいる。全くもって迷惑な男である。

我々は彼の巨体と空間に漂う残り香を追う。彼はそのまま駅を出て行き、空から降り注ぐ日光を浴びて、目を細めて嫌そうな顔をした。そして、そのまま歩き、ビルの裏側にあたるカフェに入った。看板を見ると、「カワートーコーヒー」とある。このカフェは全国に店舗を展開しているチェーン店だ。石野はここで女子高生と、落ち合う予定なのだらうか。

「俺たちも入ろう」

「しかし、臭いぜ」

和泉は綺麗な顔を、これでもかと言うほど皺くちやにして言う。

「だが、道路からだ見えにくい。入った方が良いだらう」

和泉も納得したようなので、石野に見つからないように入る。幸運にも石野は入口とレジからは見えない席に座ったようだ。店はセルフ式なので、和泉に石野を見張る事が出来る席を取らせ、私はコーヒーを購入する。以前に、商品を購入する前に席を取るのに関西人だけであると聞いたことがあるが、実際のところはよく分からない。どうでもいいことである。

私は一番小さいサイズのコーヒーを二つ注文し、それを受取って席

へ行く。石野と我々と席の間には造花が並べられており、ちょうど顔が隠れていい具合である。そして、その隙間から彼を観察する。

石野は大量のホイップクリームに乗せたアイスココアを混ぜながら、時計を見ている。どうやら本当に待ち合わせをしているようだ。「以外にも臭くないな」

コーヒーに砂糖を入れながら和泉が言う。

確かにこの店に石野の悪臭は充満していない。注意して嗅げば少しは匂いがするが、コーヒーの香りがそれを消している。以前にコーヒー豆は匂いを吸収すると話を聞いたことがある。見回すとレジの後ろに大量のコーヒー豆が見える。おそらくあの豆が石野の匂いを吸収しているのだらう。そう考えると石野の匂いがするコーヒーが今まさに販売されていることになる。そう思い至って、持っているコーヒーカップをテーブルに置く。

和泉を見る。和泉は何事もないようにコーヒーを飲んでいる。実際何事もないのだが、この原材料であるコーヒーにあいつの匂いが含まれている事を言った方がいいのではないだらうか。いや、そもそも我々が入店していた時には既に、コーヒーの抽出が終わっていたはずであるからして、今、手にしているコーヒーはまったく無害であらう。

しかしどこか気持ちが悪い。こんな事を言ったら和泉は、私を変人だとなじるだらう。コーヒーの黒さが石野の醜さの様である。

私は自然と顔をしかめていた。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2347d/>

---

四角と丸（仮）

2010年10月10日21時14分発行